

トニボ

第九号



文治堂書店

北川 太一

四六判 一八四頁
定価 一、三〇〇円

光太郎ルーツそして吉本隆明ほか

明治十年、上野公園で第二回内国勸業博覧会が開催された。木彫の途の思いを秘めていた光雲の心は「外来の波」にふれ、ゆれる。光太郎誕生までを描く高村家の「ルーツ」は光太郎伝試稿の序章となる。併せて十代からの盟友、吉本隆明との対談、論考も収める。

光太郎伝試稿

四六判 二三〇頁
定価 一、八〇〇円

ヒュウザン会前後

明治が大正に変わる一九一二年、光太郎は斎藤与里の熱意を受け岸田劉生、木村荘八等とともにヒュウザン会を興す。北山清太郎の支援・協力により催された展覧会は「公」に対するアンデパンダンであった。著者のライフワーク、試稿シリーズのⅢとなる。

神西清評論集 上下巻

上巻 外国文学 七〇〇〇円
下巻 日本文学 六〇〇〇円

三島由紀夫が師と仰いだ神西清（一九〇三―一五七）、露・仏語に堪能で、堀辰雄とともに流麗な筆致をもって新文学の移植に務めた。

和巻 耿介

B6判 一五〇頁
一、三〇〇円

評伝 新居格

大正年代からアナーキズムを基調とした文明批判を展開してジャーナリズムに活躍、大宅壮一の先駆となった。戦後は第一回公選の杉並区長となり話題を振りまいた。

野沢

はじめ

新書判 二七〇頁
九八〇円

詩集 木葉童子詩経

山梨県蛾ヶ岳四尾連湖畔の掘立小屋に、戦前六年間山籠りした若き詩人の人間賛歌。光太郎あての手紙十九通を収める。高村光太郎・序。題字・草野心平。

ふるさと文学散歩

三三二頁
三〇〇円

二本松と智恵子

文・勝畑耕一 画・のぞゑのぶひさ

曖昧をゆるさず妥協を卑しんだ高村智恵子、その五十二年の生涯を細密な画と文で綴る。

文治堂書店

杉並区 井草
2-24-15

E-mail: bunchi@pop06.odn.ne.jp
URL: <http://www.bunchi.net/>

目 次

巻頭言 神西清「内光派」文学について	木村 和	2
詩 田植えの頃・それから	曾我 貢誠	6
評伝 仙酔余滴Ⅷ 「漱石と仙酔」2	吉田 邦郎	12
詩 目的もなしに・赤い月	市川 恵子	20
私の四字熟語—紀貫之賢	青木 紀賢	25
詩 消化作用・有理化	近藤 頌	28
詩 最後の色・新芽	マエキクリコ	30
紀行 五島に世界遺産を訪ねて	熊野 友嗣	34
詩 夜行列車・ノーザンライツ	宮田 直哉	38
詩 光の欠片 ^{かけら} ・照明灯	服部 剛	40
連翹忌通信 (六)	小山 弘明	43
詩 仏陀・ハイパー仏陀	北川 光彦	46
野沢一「木葉童子」復刻版に寄せて 木葉童子がいま 微笑んだ	佐相 憲一	51
訳詩 ヨハンナ ゼーブス (ゲーテ)	勝畑 耕一	56
詩 歌 三 評 神西清全詩集に寄せて		58
望月苑巳 勝畑・服部・前木・曾我		
トンボの輪	勝畑・前木・服部・熊野・宮田	74
読者の輪・短信		79
編集後記	桶屋風太郎	80

題 字 中島敏枝 DTP 具羅夢

巻頭言

神西清「内光派」文学について

木村 和

神西清じんざいせいよしさん（一九〇三—一九五七）は、ロシア文学者、翻訳家、小説家、文芸評論家、として知れているが、日本の作家には稀有な、詩が本質にある作家である。

神西さんは、昭和三年に東京外語学校ロシア文学科を出て北大図書館に勤め、最初の小説『恢復期』を書く。昭和四年から三年間、ソ連通商部に勤めた後、文筆生活に入る。その時期のことを題材にして後に『灰色の眼の女』を書いた。

翻訳としては、チエーホフ、ツルゲーネフ、プーシキンなど、ロシア作家の作品を含め、多くの作品を手がけた。ことに、チエーホフの諸作品では、人間の俗物性や愚かさなど、鋭い人間観察にあふれた描写や、生活の何気ない部分から人物の全体像を浮かび上がらせる描写を、鮮やかに訳出した。

プーシキンのロマンティックな数々の叙事詩や抒情詩の訳出にも、神西さんみずからの詩的特質が投影されている。一方『獵人日記』でツルゲーネフが、自分は単なる傍観者だ、として作品への自己表現を避けたことに好意を示した。

また、特別な事件も起こらない日々の生活での心理描写を細やかに書いたシャルドンヌの『ロマネスク』の訳出で、作品の内なる光を明らかにした。

自作を「内光派」とみずから名付けた神西さんであるが、高名作家にしては作品数が少ない。繊細な感覚による表現で、微光の中に対象を描く詩作品の潔癖すぎる特質が、小説作品の展開には窮屈すぎたのか、寡作に終わった。病気のため作家生活が短かかったことが大きい。意欲作である『灰色の眼の女』も未完である。

『雪の宿り』は、応仁の乱に光を当てて、連歌師の貞阿が見聞したこと

をもの静かに語る作品である。そこには一九四五年に終わった戦争に対する作者の思いも込められていよう。応仁の乱の深い闇に、作者の詩心も埋め込まれてしまったかのようなのである。『白樺のある風景』や『聖痕』『ローザムンデ舞曲』などには、詩の余韻が感じられる。

病気のため思索と文筆に専念する時間が、神西さんにはあまり残されず、読者を未知の世界へと誘う文学の可能性を更に追求する作業は、突如断ち切られてしまったのである。

東京は国電山手線の大塚にあつた癌研究会付属病院に、舌癌で入院中の神西さんを、私が見舞つたのは亡くなられる年の二月末のことだった。発端は「少年」「地獄」「母たち」の三部から成る『少年』に、ある晩練馬の古書店で出会い、特に小説好きでなかつた高校生の私に衝撃を与えたことによる。それで作者がどんな人なのか、知りたくなつたのである。当時、高名な作家であつた神西さんに一読者にすぎないただの少年がお目にかかろうとすること自体、世間知らずの無作法なことだが、現在のようになかなか他人の病室に入ることがやかましく問われる時代ではなかつたので、看護婦は神西さんのベッドへと案内してくれた。そこで『少年』を読んだ感想をお伝えしたのである。すぐに病室を出た。

神西さんにとっては、病院の廊下から一少年がまちがって病室にまぎれこんだようなものだったのではないだろうか。

神西さんが亡くなられ、時を経て全集が発刊された。私が発行元の文治堂書店を訪れたのは一九七四年七月末である。日本航空を依願退社した記念に、全集の欠けた部分を補うためと、ついでに発行書店を見たかった。全集は完結していなかった。

その後、親しくなってから渡辺文治さんにかがったが編集での苦労話はあるがなさらなかった。神西さんの生前を知らない渡辺さんは、私が神西さんにお目にかかったことをうらやましがった。そして、神西さんの宝石のように輝く詩篇が好きであること、日本文学のなかでの神西作品の価値を充分に認め、世に残したかったと語るのみであった。

神西清全集は渡辺文治さんの名を出版界に輝かせた。全集刊行の意義は大きい。

(詩人)

田植えの頃

——奥羽山脈の麓の村より——

曾我貢誠

その日

朝の五時ごろから

庭先に集まり出した

家の者、みんなが出揃った

父も母も、兄も弟も叔父さんも

寝たさりの祖母もしゃんとして……

親戚の者もみんな集まった

曾場そんばのうちも、船沢ふねざのうちも

野田のんだのうちも、岩見のうちも……

村の衆もみんな来てくれた

秋雄のうちも 範雄のうちも

長子ながこのうちも 真諭紀まゆきのうちも……

今日は 田植えである

男も女もなかった

大人も子供もなかった

飯を喰う時間も惜しんで

朝から晩までよく働いた

苗代を作る者がいた

父や、親戚の男たちだ

牛の後ろに、尖った器具をつけ

田圃の中をぐるぐる回った

苗を束ねる者がいた

爺さん婆さんたちだ

孫や嫁の自慢話をしながら

どんどん束ねていった

苗を運ぶ者がいた

兄や叔父さんたちだ

リヤカーに山と積み

汗をかきかき運んでいった

横一線に並ぶ女たち

紺の野良着に裸足のままで

一本一本、心を込めて植えていった

深くもなく、浅くもなく

五月の風に、苗は気持ちよく揺れていた

子供たちは束ねた苗を

畦道から、女たちの前に投げ入れた

ときどき、とんでもない所に落ちて

泥がピシャンと跳ね、顔に掛かった

それでも女たちは、笑って手をふった

陽も傾き

西の空が真つ赤に染まる頃

我が家の一町二反の田圃は

見事に緑の絨毯に生まれ変っていた

やがて満天の星空

田植えを手伝った者たちが

茅葺の我が家にやってきた

座敷と座敷の戸がはずされ

ささやかな膳が並べられた

酒がふるまわれ

上気した男たちは陽気に歌った

女たちはおしゃべりに夢中だった

隣の居間の子どもたちは

ホンノ木の葉っぱにご飯をのせ

黄な粉をまぶした

豆の粉飯こめしをうまそうに食べた

夜も更け

誰もいなくなつた座敷の奥で

膳に残されたロースハムも

鮪の刺身も一年ぶりのご馳走だつた

いたずらして口に入れた

気のぬけたビール

舌に残つた苦さは大人の味がした

あれは、夢だつたのだろうか

それともお祭りだつたのだろうか

このような村の集いは

今では東北のどこにもない

それから

茅葺の我が家は解体された
父も母ももうこの世にいない

火の見櫓みやぐらのあった広場に立つ

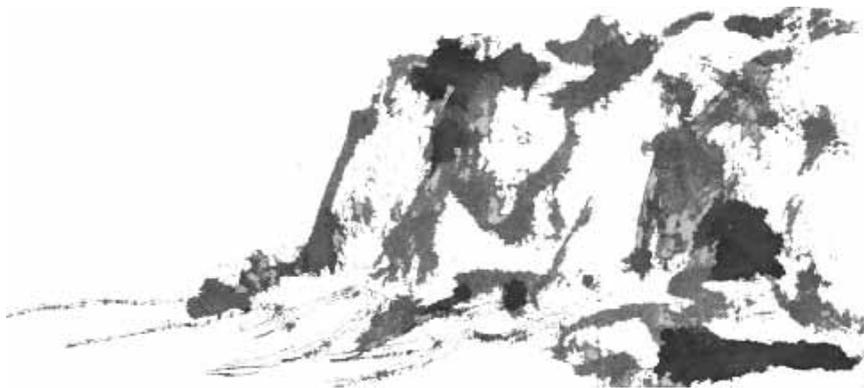
よく遊んだ 缶蹴りに追いつけつこ
みんなどこかに消えてしまった

子どもたちの歓声も聞こえない
遠くに雪のかぶった太平山たいへいざんが見える

眼の前を見渡してみる

雑草が生えた休耕田の横を

田植え機の男が一人苗を植えていく
見守るのは電線に連なるカラスたち
山と空の青さだけは昔のままだ



仙酔余滴Ⅷ

漱石と仙酔2 後日の雑感

吉田邦郎

1 『猫』読後の漱石本遍歴

前号では漱石没後百年を記念して連載された平成二八年四月八日の朝日新聞『猫』（12号）に「主人（苦沙弥）がエピクテタスの本を開いて見る」場面があり、注釈としてエピクテタスは「ギリシャ、ストア派の哲学者で、当時、齋木仙酔訳『エピクテート遺著』などが修養書として読まれた」旨の説明が付されていた。そのことに触発されて、『猫』の中に祖父仙酔の面影を求めて精読し、無謀にも九章に出てくる「八木独仙のモデルは齋木仙酔である」と結論付けた。

筆者が漱石の小説を読んだのは七十年近くも前、それも『坊ちゃん』や『三四郎』『草枕』『猫』などの初期の作品のみであった。しかも今回『猫』を読み返して、どうもこの作品は最初の一、二、三章しか読んでいなかったことに気が付いた。

「吾輩は猫である。名前はまだない。」の出だしや苦沙弥郎の吾輩が「車屋の黒」と付合う場面などは鮮明に覚えていたが、たわいのない風刺を散りばめた滑稽譚としてしか理解していなかった。それに八木独仙の登場や最終章では猫がビールを飲み大きな甕かめに落ちて死んでしまうことなど読んだ記憶が全くない。

同様に『坊ちゃん』や『三四郎』、『草枕』なども終りまで読んだのだろうか?……と自信を無くし、集英社版日本文学全集、夏目漱石集(一)の『坊ちゃん』や『三四郎』、『草枕』を読み直し、巻末の荒正人の「作家と作品」にも眼を通した。(注1)

この三作品は確かに終りまで読んでいたことを確認し安堵すると同時に改めて作品に出てくる内外の思想への漱石の深い造詣と絢爛たる文化人の人脈に圧倒された。漱石研究者も多数おり、本来素人の老生が出る幕ではない。先に「無謀にも」と述べたのはその意味である。同時に感じたことは、漱石の人脈として登場する人物の中に、仙酔と関わりのある人も多数いることであった。今回『猫』と仙酔との関わりについても一度考え、無謀にも『猫』の中に、多分これまで誰も述べなかつた登場人物のモデルが同時代の誰であるかを類推してみた。

(注1) 集英社の日本文学全集には、どういふ訳か『猫』は一巻にも二巻にも載っていない。

2 『猫』の猫にひびく

その前に、猫についても漱石の博識ぶりを示しておこう。高校時代の筆者は「猫に語らせた」のは漱石の思い

つきとしか思っていなかった。しかしこの着想も彼の豊富な西欧文化への知識が生かされていた。猫が語る着想は一般には「ト」>「ホ」フマンの小説『牡猫ムルの人生観』から得たとされているが、トマス・グレイの詩から採ったのではないだろうか。その第一章には博識な猫が己を「グレイの金魚を偷ぬすんだ猫位の資格はある」と威張る場面がある。また最終章にある吾輩の死はグレイの「愛猫を弔うた——金魚の鉢に溺れて死んだ猫の詩」の状況にそっくりである。グレイの『墓畔の哀歌』(福原麟太郎訳)に載っているこの詩の触りの部分を紹介する。こちらの猫は雌でセリマという。

背の高いかめのふちで起こつたことだ
そのかめにはシナの豪華な芸術か
紺青の花を彩つて咲かせていた。

世にも淑やかなトラねこのやからで
もの思いがちなセリマは身を寄せて
下の湖を見つめていた。

(中略)

すべすべした縁に足をさらわれて、
まっさかさまに彼女は落ちた。

湖水の中から八度、頭を出して
あらゆる水神に鳴いて訴えて

急ぎの助けを求めたのだが、

イルカも来ねば、海の精すら動かない。

手荒なトムもスーザンも、耳が無い。

お気に入りには、友達がないものだ。

3 漱石の多彩な人脈

—米山保三郎、元良勇次郎—

漱石の豊富な人と知のネットワークを描いた本に『夏目漱石と西田幾多郎』（岩波新書 小林敏明著）がある。膨大な史料を読み込んで一般には余り知られていない漱石と西田との交錯を解き明かした力作である。本書に深く触れることは『猫』のみから「漱石と仙酔」の交錯を探る本稿の目的から外れる。しかし、この本には仙酔の人脈と重なる部分や前号では割愛した『猫』に登場する重要人物や、筆者がモデルに心当たりがある人物が描かれている。ということ、その部分だけは引用させて頂く。

まず触れたのは『猫』の第三章で「空間を研究し、論語を読み、焼芋を食い、鼻汁を垂らす人」と苦沙弥が表現した天然居士こと、曾呂崎についてである。

既に定説となっているがこのモデルは若き日の漱石の親友で今では伝説的な人物となっている米山保三郎と

いうことである。漱石が第一高等学校（注2）に進学（1888年）し、出会った友人には正岡子規や菅虎雄等とともに米山保三郎がいた。加賀出身（西田幾多郎の先輩）の秀才で、彼の助言で建築学を志していた漱石は英文学に志望を変更し、子規は彼の秀才ぶりを見て、自分はその任にあらざうとして哲学を諦め国文科に転科した由である。（注2）当初は第一高等中学校

上記『猫』第三章は亡くなった曾呂崎を苦沙弥が偲んで、その墓碑銘を考える場面である。考慮中に迷宮が来て「一体だれが天然居士なんて名を付けたんだ」と聞き、苦沙弥は「例の曾呂崎の事だ。卒業して大学院に入り空間論」を研究したが「勉強し過ぎて腹膜炎で死んだ。曾呂崎は僕の親友なのだ」（二部省略）と語っている。

将来を嘱望された実際の米山（1869～1897）も僅か二八歳の若さで亡くなっている。一方、東大に進んだ漱石や米山等に心理学や倫理学を教え絶大な影響を与えた人物に教授の元良勇次郎がいる。米山は二五歳で元良と共著で高校用心理学講義の本を出版している。元良勇次郎（1858～1912）は同志社出身で、米国でウイリアム・ジェームスを学び、生涯キリスト教徒であり、夫人と共に仙酔の関わりが大きい弓町本郷協会にも深く関わっていた。

さて『猫』の中の曾呂崎の墓碑銘は、当初、漱石の捻



米山保三郎(右)と漱石(左) (『漱石写真貼』より)

り出した単なる諧謔だと思っていたが、天然居士という名は米山が鎌倉円覚寺の今北洪川から実際に授かった号で、墓碑銘も『碧眼録』に以下のような出典がある。
(注3) 『碧眼録』第三四則の評唱 懶瓚和尚、衡山の石室の中に隠居す。唐の肅宗、其の名を聞き、使を遣して之を召す。(中略) 瓚方に牛糞の火を撥てて、焼芋を尋りて食すに、寒涕、顎に垂れて、未だ嘗て答えず。
(後略)

他方、元良勇次郎であるが、彼は三田藩造士館教授・杉田泰の次男として生まれ、十五歳のときに「D.デービスから洗礼を受け、二年後の明治八年には創立直後の

同志社英学校へ中島力造、上野栄三郎らと入学している。(初年度の入学者は八人) デービスは新島襄を助け同志社設立に参加した人物で彼との関わりで元良は同志社へ入った。また翌九年には横井時雄、小崎弘道、海老名弾正ら熊本バンド出身で後に本郷教会牧師や同志社総長などになった人達が入学している。このような関係から筆者は「元良勇次郎もきっと本郷教会と関わっている」と推量し、仙酔研究で愛用した『新人』『新女界』の研究(同志社大学人文科学研究所編)を改めて読み漁った。以下はその結果である。

仙酔が本郷教会を去り渡米した一九〇七年度の教会役員名簿には執事として元良米子の名が見られ、また教会の機関誌『新人』の一九一四年から一九九年までの新年号の挨拶には新人社の幹部の名前が列挙されているが、そこに、ほぼ毎年登場している人物には、海老名弾正、吉野作造、安井哲子、海老名みや子、元良よね子、野口精子らがいる。また『新人』の兄妹誌『新女界』(一九〇二年創刊)の常連執筆陣の中には海老名夫妻、野口精子、安井哲子、吉野作造、小橋三四子、内ヶ崎作三郎等と共に元良よね子の名が見られ、さらに夫妻の執筆者として野口精子と末彦、宮川寿美子と経輝、新渡戸まり子と稲造などと共に元良よね子と勇次郎夫妻の名も挙がっている。

る。(上掲誌、宮沢正典)

ただし、勇次郎が『新女界』に執筆した記録は一回のみで、その原因は一九一二年に勇次郎が逝去したためと思われる。彼が本郷教会と関わりを持ったのはもう少し古く横井時雄が牧師の時代であった。しかし、夫人のよね子は彼の逝去後も永らく同教会の活動に携わっていた。(上掲誌、田中真人)

漱石が東大英文科の学生だった一八九〇年からの三年間で知り合った仲間の一人に松本亦太郎がいる。彼は早世した元良の跡をついで後年、東大の心理学講座を担当し、日本心理学会を創設した人である。一方、明治二十年代は本郷教会の草創期で会員には東大や早大、女高師などの学生が多く、横井時雄が外遊し後を引き継いだ村井知至は「男女ともに秀才揃いで同教会は書生の教会」のようであったと書いている。(村井知至『本郷教会創立五十年』)

村井の挙げた十名の秀才のトップに松本亦太郎の名があった。他には有吉忠一、朝河貫一、高根義人、五嶋清太郎らがあり、また女性会員には塚本はま子、野口幽香、前田園子、荻野吟子らがいる。いずれも後世、名を残した人たちである。(上掲誌、太田雅夫)

最後にもう一人、漱石の人脈に本郷教会と関係した人物がいた。元良勇次郎と同時期に東大で哲学を教えていたラファエル・フォン・ケーベル教授である。ロシア生まれで元々はモスクワ音楽院でピアノを学び、後にイエナやハイデルベルグで哲学を学んだ人で、漱石ら学生達に人気があった。一方、本郷教会には菫蒲会という婦人の会があり、時期的には十数年後のことであるが(一九〇七年)東京音楽学校で開催された菫蒲会では「アウグスト・ユンケルのピアノ独奏、藤井(三浦)環の独唱のほか、ケーベル博士がベートベンのソナタを白髪をたなびかせて」演奏したことが『新人』に記されている。(上掲誌、竹中正男)なお彼の思想的背景については上掲誌、水谷誠氏の「『新人』とドイツ宗教哲学」に詳しい。

4 『猫』の天道公平と理野陶然のモデルか？

— 綱島梁川、藤村操 —

前号では、哲学者らしい珍客に論された苦沙弥が、書齋で沈黙考中、迷亭が来て、その珍客の受け売りをする苦沙弥の話聞いて、「八木独仙君のようなことをいつてるね」という場面から、筆者は「八木独仙のモデルは斎木仙酔」説を展開した。

『猫』の中では以降、迷亭が独仙への批判論を繰り広

げる。(九章)「一人で悟っていればいいが、人を誘いだすから悪い」として「御陰で二人ばかり気狂にされ」たとし、その一人は「理野陶然で、独仙の御陰で円覚寺前の汽車の踏切のレール上で座禅を組んだり、境内の蓮池に入ったりし、腹膜炎を起こして死んだ」と述べ、もう一人は「立町老梅で、やはり独仙にそそのかされて鰻が天上するような事ばかり言い、とうとう巢鴨の精神病院へ収容された」旨の話をする。さらに「自大狂で大気炎を吐き、近頃は立町老梅を改め、天道公平と号し、天道の権化を以て任じている」と苦沙弥に説いている。

この部分を読んで、筆者がまず連想したことは、『猫』出版の二年前の一九〇三年、華嚴の滝に「巖頭の感」を遺して投身自殺した藤村操のことである。彼は当時、一高生で漱石の英語の授業を受けており自死の数日前、漱石から授業中叱責を受け、彼はその叱責を悔やんだ話も伝えられている。一読して筆者は「理野陶然のモデルは藤村操である」と直感した。一方「天道公平のモデルは、もしかしたら綱島梁川ではないか」と思ったが、こちらは確信がもてなかった。

迷亭は「理野陶然及び立町老梅改め天道公平の二人は独仙が誘い込んだ仲間である」と苦沙弥に説明している。もし筆者の上記直感が正しければ、仙酔、藤村操、梁川

三人共通の場は本郷教会しか考えられない。しかし筆者の知る限り藤村操が同教会に関わった形跡はない。すべて筆者の誤解かなと思いかけた時に見つけたのが、『新人』『新女界』の研究』の中の關岡一成氏の論文『新人』と綱島梁川である。

その四章に「梁川と魚住影雄・宇佐見英太郎」があり、魚住が「一高で藤村操の親友であったこと」、「姫路中学時代から内村鑑三の影響を受け、上京後は種々の経緯の後、一九〇三年に本郷教会会員となり、特に梁川に心酔し彼を師として仰ぎ、阿部能成らに紹介したこと」などが記されている。藤村操が一七歳になる直前に急逝した折に、彼は『新人』に「藤村操君の死を悼みて」という弔文を寄せている。四年後には梁川も逝き、魚住影雄(折蘆)は、同様に梁川を師と仰いでいた一燈園の西田天香に身を寄せたが、彼自身も藤村没後七年、二七歳の若さで亡くなっている。

いずれにしる藤村操が三歳年長の親友・魚住や『新人』に多数載せられた梁川の著作を通じて、その宗教思想に影響を受けたことは間違いない。

『猫』の理野陶然のモデルはやはり藤村操であろう。なお、蛇足であるが、宇佐見英太郎も梁川に傾倒した本郷教会の会員で子規に師事した俳人でもあった。『新人』の俳句欄を担当した人である。綱島梁川(栄一郎)につ

いては、とても本稿では語り尽くせない。ごく短い経歴と青年たちに大きな影響をあたえた晩年の宗教意識の一端のみを披瀝する。

綱島梁川（1873～1907）は郷里岡山でわずか一四歳の時に高梁教会で受洗、生涯を通してキリスト教徒で（晩年は異端と言われた）あったが、幼少期から白隠禪師や親鸞にも親しみ、また本居宣長、平田篤胤の神道の影響も受けている。一八歳で上京、早稲田に学び、横井時雄牧師時代の本郷教会に通ったが、二一三歳のとき突然咯血、帰郷・療養を余儀なくされた。帰郷中、神戸教会牧師であった海老名弾正に会い肝胆相照らしている。八か月後に一応回復し再上京し、相前後して海老名弾正も帰京し再び本郷教会牧師となった。病弱の梁川は教会へは余り顔を出さなかった模様であるが、三四歳で亡くなるまでに『新人』へは二二篇もの論文を書いている。

その中で当時の若者たちに絶大な影響を与えたのは三回にわたり連載された晩年の「予が見神の実験」である。關岡氏は、病身の梁川が「神懸り状態になって自分の意識が完全に失われ」たわけではなく、「神秘的な体験であったが、（中略）それまでもあった『神の子』の意識がますます明瞭になり、確信できるようになったこと

ある」と解説している。

梁川は仙酔より七歳も年上であり、若者への影響力は圧倒的に梁川の方が大きい。仙酔の哲学に対する梁川の批判に対し、仙酔は『新人』に「綱島梁川氏に応う」（注4）を書いていますが、高邁な梁川の人格故にか、その反論も遠慮がちである。

『猫』の天道公平という名前もやはり梁川に相応しい

（注4）参照、『忘れられた宗教哲学者斎木仙酔』（二二八～一三八頁）

5 アンビヴァレントな漱石の人生観

『猫』の中では独仙を批判した迷亭が帰ったあと、夕食後に再び書斎に入った苦沙弥は以下のように考え始めた。

「自分が感服して、大に見習おうとした八木独仙君も迷亭の話しによって見ると、別段見習うにも及ばない人間の間である。のみならず彼の唱導するところの説は何だか非常識で、迷亭のいう通り多少瘋癲的系統に属しておりそうだ。いわんや彼は歴乎とした気狂の子分を有している。甚だ危険である。滅多に近寄ると同系統に引き摺り込まれそうである。自分が文章の上において驚嘆の余、これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思ひ込んだ天道公平事立松老梅は（中略）巢鴨の病院

に起居している」

漱石や仙酔が生きたこの時代を「憑依ひょういの近代」と呼ぶ人もいる。近代科学が急速に発達し産業革命が起こり、ニーチェやダーウインが現れ、西欧のキリスト教化や社会が揺らぎ始めた時代である。思想的には西欧でもシュタイナーの神智学などが広まり、わが国では綱島梁川や仙酔以外にも松村介石、成瀬仁蔵、宮崎虎之助、西田天香などが現れた。その思想は常人にはエキセントリック (eccentric) に思えても深い宗教的、哲学的意味が含まれている場合が多い。

『猫』の中での右記、傍線を付した部分は、単に小説の上のことではなく、漱石の本音であろう。漱石（苦沙弥）は天道公平（綱島梁川？）を一方では大見識を有する偉人と認めながらも、他方では危険な人物とし、精神病院の患者にしてしまった。では漱石とは一体どういう人物だったのだろうか？

鍵は3章に挙げた小林敏明氏の本にあった。日露戦争に対する漱石の姿勢である。小林氏は「漱石が戦争に対して抱いた感情は（中略）正負ないまぜになつたアンビヴァレントなものであつた。漱石におけるこのアンビヴァレントは一方で『戦やまん、吾武揚らん』とい

うような陳腐な戦争詩『従軍行』を書いたかと思えば、『猫』の中に進行中の戦争のパロディやアイロニーなどを書きこんだりする」と記している。

アンビヴァレント (ambivalent) ……英和辞書を引くと心理両面価値（同時に同一対象に対して矛盾する二つの感情（価値）をもつ精神状態への形容）とある。戦争に対するのと同様、当時の西欧文明に対する漱石の感情もアンビヴァレントなものだったのでないだろうか。圧倒的な西欧の科学技術や彼自身が学び、身につけた長い歴史のある西欧の文物や文芸に対しては深い尊敬の念を抱きながら、キリスト教の神に対しては違和感を拭ききれなかつたのであろう。英国留学中、神経衰弱になつたのはその居心地の悪さからであらう。帰国後には第一級の教養を身につけながら、多数の家族を扶養しなければならぬ彼は、意外と常識人であつた。『こころ』や『行人』などを書いた最晩年はいざ知らず、それまでが梁川のように貧しくとも、エキセントリックに宗教や思想にのめり込むのは本能的に危険と感じたのであろう。

（以下次号）

目的もなしに

市川恵子

海をみにいく

そのたびに

海の色が灰色だと知った

十五の冬を思い出す

夕焼けを眺めながら

ほんとうは

夕焼けをみているわけではないと

気付いたのは

いつのころからだっただろう

空と海との間にひろがる

境界線に身をまかせると
漣はいつしか無音となり
水面に浮かぶ夕日の参道から
ことばが渡ってくる

—— ゆっくりでいい。自分の力で

海は云う

見晴るかすことのたいせつさを
手放すことのきびしさを

沖には島がひとつ

水平線は

永遠ではない

赤い月

市川恵子

夜明け前、泣こうとして
玄関の扉をあけた

月がさきに泣いていた

さきに泣かれると

後から泣くことはできない

一瞬を閉じきることのできない

有明の月

真つ赤に眼球を腫らして

眸を必死に 薄くとも見開いて

わたしを見下ろしていた

無心に眠ることを許された人間は
しあわせだ

有明の月は泣き腫らした眸のまま
眠ることが許されない

沈黙の赤い剣が

闇のなかで 浮いている

もう、無理だという貌をして

哭いている

その声を

誰にも伝えられない

しずかに横たわった者だけが

その声を拾うことができるのだろうか

月の声が

聞こえていたのか

その翌日、

日付を跨いで

みずから

刻を選び

うつくしく

それはとても うつくしく

母は亡くなった

私の四字熟語―紀貫之賢

青木紀賢

意味ありげな四字を掲げて、ご挨拶をします。

(きかんのけん)と読み「世紀を貫く賢さ」とでも解釈するのでしようか？

新元号の「令和」の出典元として明らかにされた万葉集と双璧の、(という)と新古今和歌集に叱られるかもしれないが、古今和歌集の選者の一人で、三十六歌仙の一人と言われる紀貫之さんに、恐れ多くも私の名前を紛れ込ませた四字で、「紀貫之は賢い」と読まれても嬉しいです。

私の名前は父親が神主に相談して付けたと、母親から聞いていました。私は太平洋戦争勃発の年に生まれ、前年の一九四〇年は神武天皇即位紀元(皇紀)二六〇〇年にあたり、記念行事が国を挙げて行われました。国威発揚の雰囲気の中で、当時の子の名前に(紀)が採用されたのかもしれない。小学生から大学生になるまでにお世話になった多くの先生方にも、誰一人として(としかた)と、読んではもらえぬ名前でしたが、紀賢は紀貫之

に少し似ていて、私は、まあいいじゃあないかと思つて我慢してきました。

私は最近でこそ食道発声で妻との会話はできるのですが、会席などの人込みの中では声量が小さく聞き取りにくいために、電子メモパッドを携帯しています。写真用紙の2L版の両面で文字を書いて直ぐに消せる文字書きボードです。島岡明子さんを偲ぶ会で同席になった勝畑さんと、このツールで筆談しました。会話の中で何かがきっかけになって、いつの間にかボードを介して創作四字熟語のやり取りが始まっていたのです。野末陳平著「四字熟語365日」をトイレにおいて時々眺めたりはしましたが、本気で作ってみようなどとは思つたことはありませんでした。

その後を送っていただいた真藤建志郎著「四字熟語」の辞典には人生を語るにふさわしい膨大な四字熟語がちりばめられていて素敵な本でした。勉強して、ちゃんとした四字熟語を創作しなさいと促されているようで嬉しい気持ちになりました。漢字圏に生まれたからこそその文化だと感じ入りました。今回は六つ、私の創作にいたる経緯を交えて作ってみました。

喉頭無頸(こうとうむけい)

二〇一七年十二月に私は突然の喉頭がん・ステージⅢの告知で声帯除去及び頸部郭清の手術を余儀なくされた

のです。私にとって、まさにこれぞ晴天霹靂というべきものでした。

頭部リンパ節に転移が見られたので、隣り合わせに密集する多種の神経や静脈をかき分けての左頭部の手術も同時に行ったのです。手術所要時間は七時間の予定でしたが、郭清すべきリンパ節が静脈と絡むように密着していて、医師団が苦勞したようで、手術には九時間がかかりました。病室に戻り全身麻酔のさめきれない朦朧とした私の目に家族の安堵した顔がかわるがわる映りました。手術前後の心境を四字で表したつもりですので、どうぞ、同音異語の有名な四字熟語で叱らないでください。

無喉有声（むこうゆうせい）

私は声帯を除去したため、声を出すことが出来なくなりましたが、妻と会話はできていと前述しました。手術後は肺から喉への気管は声帯の無いまま、首の付け根に気孔を開けて外気につながっています。鼻と口からの呼吸機能は無くなりましたが、新気管口からは、思い切りの深呼吸も出来ます。喉摘者となった私が交信する手段は筆談以外には三通りあり、電動機器を喉に当て、その振動で口パクをして発声する方法、外気につなぐ気孔に新たな手術を施して行うシャント発声、私は機器や再手術に頼らず、自力でやれる食道発声法を学ぶことを選びました。自力で食道の上部まで外気を取り込み、取り

込んだわずかの空気を喉元で音にする方法です。喉頭部の声帯は無くしましたが、替りの声を得ることが出来たのです。一年半前までは知らなかった新しい声の世界です。

顔色不変（がんしよくふへん）

失うものに未練を持つより残るものに目を向けよう。私は新生児が育つように、ここで生まれ変わるのだと、手術前から強く思うことで不思議な落ち着きをもち、現実に動ずることなく手術後の生活にも向かうことが出来ました。プロの囲碁対局でも形勢に係わらず、終始ボーカーフェイスの棋士がいます。喜怒哀楽を都度、表情に出したり、逆にフェイクで頭をかいたりして見せるのはその人の癖や性格ですから、それをとやかくは言えませんが。私の場合は周辺の人たちに余分な心配や不安を与えたくないで、顔色を変えず平静でいたいと思う気持ちが強くて働いているのかもしれない。

一碁一絵（いちごいちえ）

幼いころ、一緒に遊んでいた友達がいなくなると、私は泣いて母親を困らせたようです。喜寿を過ぎても友人知人が周りに大勢いるのは嬉しいことです。訃報を聞けるのは自分がまだ生きていることの証でもあります。私の囲碁の師匠は永年勤務した会社の先輩杉山治雄さんで、互いの家を行き来して対局しました。訃報に接した

のは、大学時代の友人達と旅先から帰国する航空機の中で妻からの携帯電話でした。私に弔辞を読めという遺言まで聞かされ、機中で弔文をあれこれ考えたことを思い出します。師匠とはハンデキャップをつけて二子か三子で打ちましたが互先で打たせてもらえぬまま、他界されました。たまに互先で打つ友人もいますが、今ではもっぱらパソコンに入れている囲碁ソフトの自称四段を相手にカーソルを動かす対戦ですが、五子置いてもめつたに勝てません。

また、手術以降は仕事の縮小を余儀なくされた半面、自由な時間が増えましたので、二年に一枚、が二ヶ月に一枚にペースが上がるほどに油絵を気ままに描くのも日常となりました。一局の碁と一枚の絵は私の日常の趣味となっておりませう。

豚登木上（とんともくじょう）

詩誌トンボに四字熟語を書いてみないか、とのお誘いに私はおだてられた豚が木にも登るような気になってしまいました。何世紀をも貫いて熟成された四字熟語は味わい深いものばかりです。文筆家でもない門外漢の私が新たな創作に係わることにはいまだ委縮するばかりです。

大暑之生（たいしよのせい）

二十四節気の一つ、大暑が誕生日の私はこの夏に自動車運転免許の更新に先立つ高齢者講習を受けました。何かの絵をあらかじめ見せて、しばらくの講義のあと、何の絵が描いてあったかを答えさせる認知症のテストも満点とはいかず、思考力の低下が避けられない年齢になりましたが、今回発表の機会を得て、日頃の雑感などを四字熟語で表すという作業は私の思考回路を少し拡げてくれたのかもしれない。

（あおき としかた）静岡市在住



消化作用

近藤
頌

うす汚れた善意も

のみ込んでしまえば

滋養そのもの

身体の中に入れてしまえば

あとは消化を続けるほかない

こんな単純な構造だから

わかりやすい毒も

うまく吐き出せず

糧にすらしようとするのだ

有理化

割りきれない思いに

割りきれない思いをかけて

具体的対策と傾向的知見を練る

解決はされない

明確になるのもまれ

ただ分母への甘えに

ひとつ、筋を通したかっただけ

The last color.

Kuriko Maeki

After the typhoon passed
On the first day of October,
Surviver leaves shine so...proudly

Before turning into fall colors,
Green carpets are formed by
Scattered leaves so...strangely

We too have no choice for the last color,
But we all turn into
Nourishing soils...likewise

So, let us dance in the wind,
And yield to the wind
Just like leaves...willingly

最後の色。

マエキ クリコ

十月初日の台風にも負ケズ
枝に残った葉のきらめきは
格別…だ

秋色に染まることなく散ツタ
緑の葉のじゅうたんは
異色…だ

私たちも、最後の色は選べない
でも、いつか養分になることには
大差…ない

風に踊り、
風に委ねよう、
葉っぱのよう…に

New Sprouts

Eight years have passed
Most of my students
Do not know or remember
The Disaster

Though some things are better unknown
Some things are better learned
For it takes some knowledge
To appreciate not knowing the unknown

Like the green sprouts in Hiroshima
Covering the ground where
Nothing was expected to grow
Children of the new generation are sprouting

Plants have purifying effect, they say
Dear sprouting children,
Please purify this world
From hatred, grudge, cruelty and indifference

Wilt I may,
but only after teaching them
Everything I must pass on
Like the preceding plants have

新芽

あれから8年が経って、
私の生徒達のほとんどが
あの震災を知らない
或いは覚えていない

知らなくていいこともあるが
知っていて欲しいこともある
知らなければ、知らないことの有難味が
わからないことも、きっとあるのだ

草も生えないと言われた
ヒロシマの大地を覆った
緑の新芽のように
次の世代の子等は伸びる

草木には浄化作用があるらしい
新芽なる子ども達よ、
この世界をどうか浄化して欲しい
憎しみ、恨み、非情、そして無関心から

そのために伝えるべきことを
みな伝えてから、私は枯れたい
私を育ててくれた
先の草木のように



五島に世界遺産を訪ねて

熊野友嗣

今年の春、私はインターネットの旅行記事の取材で長崎県の五島列島へ渡った。ウェブ上で主に航空券を販売する会社の仕事なのだが、

フェリーのチケットも取り扱っているので、合わせて船旅を促すような旅行記が欲しいということだった。

記事はすでにネット上にいくつか掲載されているのだが、いまや世はSNS社会。紙媒体の読者でも、さらにはパソコンユーザーでもなく、その内容は平成年のスマホユーザーをターゲットとしている。

そこで最も重要視される

のは、一にも二にもキレイな写真、いわゆる「インスタ映え」だ。歴史も伝統も、礼節も物語も関係ない。ただ第一印象が目を惹くかどうか、それだけである。文章は、極端に言えばその写真をどこでどのようにすれば撮れるかの説明に過ぎない。

幸い記事の評判はまずまずであったが、そのような旅が私の志向の向こう岸にあることは、これまで私の随筆を読んでいただいた方ならお分かりいただけるだろう。今回の話は、ネットには載せなかつたあれやこれやの旅草子ということになる。

五島列島は長崎県の西方沖にあり、南北に大小一四〇ほどの島々が連なっている。南端の福江島が面積・人口ともに最大で、そこには空港もある。福岡や長崎から飛行機で渡ることできるのだが、件の理由から私は福岡からのフェリーに搭乗した。このフェリーは途中四つの島に寄港し、福江港へと至る。下りの船は夜行で、最初の宇久島には午前三時台に到着する。私はその次の小値賀島に午前四時過ぎごろ降り立ったが、迎りはまだ

真つ暗なので、港の仮眠室で朝を待った。

ここでの目的は、町営の渡船でさらに二十分ほどの野崎島だ。野崎島は二十世紀末に無人島となっているが、ここには二〇一八年に世界遺産に登録された旧野首教会がある。五島には全部で四つの世界遺産の教会堂があり、三泊の旅程でそのうち三つを見学することができた。

五島には教会が多いが、その理由は江戸時代に遡る。寛永十四年（一六三七）に起きた高原の乱により日本のキリスト教徒は厳しく弾圧されたが、それでも信仰を棄てなかつた潜伏キリシタンは、江戸も後期となると公然の秘密のような存在となつていった。そのころ、九州本土の大村藩では領内の人口過多が問題となつていた。逆に五島列島を領する福江藩や平戸藩では人手が不足していたため、キリシタンを含む移民を受け入れることになつたのだ。

当初はうまくいくかに見えた移住政策だが、予想以上の希望者が海を渡つたため、平地の少ない五島ではすぐに土地が足りなくなつた。そのため信仰を異にするキリシタンは、弾圧こそされなかつたものの、開拓の難しい、険しい土地への入植を余儀なくされた。彼らは険阻な山肌や入り江を切り開き、ひっそりと土着していった。

さて、野崎島への渡船は朝夕の一日二便しかない。島には外来者用のガイドンス施設があるが、渡航者がいる

日だけ鍵を閉鎖する。そのため、小値賀から入島すると、行きも帰りも町の観光案内所の職員と同乗することになる。この日の担当者、五十を過ぎて首都圏から小値賀島へ移住したばかりとのこと。聞けば近年、都会から五島への移住者が増えているのだそうだ。

港の集落跡は、修復保存されている神主の屋敷を除いて、完全な廃墟となつている。崩れた家々や石塀の間から時おり影が動き、音がするが、それはすべて鹿の仕業だ。畑でも道でも、今では人の居たすべての景色に彼らが溶け込んでいる。

職員さんによれば、野崎島の鹿は、数は多いものの食糧に乏しいため、決して大きくはなれないのだという。それは翻つて人間も同じはずであり、この島に隠れざるを得なかつたキリシタンの、苦勞と信仰の姿を体現しているように思えた。

野崎島は二つの山塊がつながつた落花生状の形をしていて、その鞍部に野首の集落跡がある。山の斜面に石を積んで無数の段々畑を拓き、そのなかに赤煉瓦の教会がぽつんと建っている。司祭もいない教会堂だが、今も祈りの場として内部は撮影が禁止されている。見学自体は自由で、リブ・ヴォールトのアーチ天井に、ステンドグラス越しのやわらかに色づいた光が美しい。

野首教会をはじめ五島の多くの教会建築は、原爆で倒

壊した浦上天主堂の再建も手掛けた、棟梁鉄川与助の作品だ。その完成度とは裏腹に、当時の集落にこの教会に比肩しうる建物があったとは想像しがたい。野首の人々にとつて、教会がいかに重要であったかがうかがえる。

この日は小値賀島の民宿に泊まったのだが、翌日は来たときと同じ早朝の船に乗るため、誰も起こさぬよう人知れず真つ暗な中を出発しなければならなかった。小値賀の次の港を出るころによく日が昇り、船は島々に挟まれた細い瀬戸を進んでいく。その景色は海を行くフェリーというより、渓谷のライン下りをする遊覧船のようだった。

すると、朝の甲板に、私のほかにもう一人の乗船客が上がってきた。私の倍ほどの年齢かと思える男性で、今まさに船を両側から挟み込んでいる島の、その片割れで生まれ育ったのだという。かつてこの瀬戸を手漕ぎのたらい船で往来していたこと、うっかり落ちると早瀬にもまれて大変だったこと、車のない時代には島内の移動も山道ばかりでとても苦労したことなどを、生き生きと語ってくれた。また五島ではサザエが名物のひとつだが、あまり潮が速いところだと、流されないように殻のトゲが大きくなり、そういうサザエは身が小さく固くて美味しくないのだということも教えてくれた。今は大阪に住んでいるが、親戚や同級生の集まりで帰ってきたという

ことだった。結局その方とは、終着港の福江まで同道して別れることになった。

福江は五島で唯一の市街地らしい市街地である。福江城は日本で最も新しく築かれた城のひとつだが、ここではその話は割愛する。

福江島の観光は翌日に回し、この日は沖合の久賀島ひさかじまと奈留島なるとの教会堂めぐりのツアーに参加した。私はツアーを利用することは滅多にない。だが、先述のとおり五島の古い教会は辺鄙な場所であり、島同士の公共の移動手段が限られていることから、残念ながらツアーなしで効率的に島々を巡ることは困難であった。道中何度も時間厳守を訴えられたが、あれはおそらく自由に行動したが私に、ガイドさんが気を揉んでいたのだろう。

久賀島は、五榜の掲示によつて行われた明治初期のクリシタン弾圧の中でも、とくに悲劇とされる「牢屋の窄ささ」の舞台となった。それまで細々とはあるが平穩に暮らしていた約二百人も潜伏クリシタンが、わずか六坪ほどの牢に押し込められ、そのうち四二名が殉教した。座ることも床に足を付けることもままならず、ある少女は蛆に下腹を食い破られ、別の少女は髪も抜け落ち熱にうなされながら、「これからパライソに行くから」と言つて息を引き取つたといわれる。その跡には墓碑と堂宇が建ち、脇には春先とて五島椿がまだ数輪花をつけて

第64回連翹忌の御案内

高村光太郎を偲ぶ連翹忌の集いを、下記のとおり開催いたします。

毎年、高村家の皆様、生前の光太郎を知る方々、美術館、文学館、出版、芸能、教育関係の方々など、多数のご参加を頂いております。

参加資格はただひとつ、「健全な精神で高村光太郎を敬愛すること」のみです。

日 時 令和2年4月2日(木)
午後5時30分～午後8時

会 場 日比谷松本楼
〒100-0012 千代田区日比谷公園 1-2
tel 03-3503-1451(代)

会 費 11,000円

会費を下記のうち口座に
3月24日(火)までにご送金下さい。
会費ご送金を以て出席確認とさせていただきます。

00100-8-782139
口座名義 小山弘明(コヤマヒロアキ)
通信欄にはフルネームをお書き下さい。

問い合わせ

高村光太郎連翹忌運営委員会 代表 小山弘明
〒287-0041 千葉県香取市玉造 3-5-13
Tel/Fax 0478-54-0671
携帯 090-6175-6254
e-mail : koyama@aurora.ocn.ne.jp

いた。その鮮やかな赤色は、天上からはどのように見えるのだろうか、しばし考えに耽っていた。
久賀島の旧五輪教会堂と奈留島の江上天主堂は、どちらも世界遺産の構成資産となっている。両者の最たる特徴は、国内でも貴重な木造教会であることだ。とくに前者は歴史が古く、屋根は瓦葺きで窓は引き戸。まさに日本で二百年以上信仰を紡いできた潜伏キリシタンらしい和の建築だ。

それについて天井はきちんとヴォールト式になっている。ガイドさんの話では、このアーチは木材を削るのではなく曲げて作られており、その技術はヨーロッパにはないのだとか。改めて見上げると、今度は和船の底を眺めているような気分になる。
一人で訪ねていたらこの話は聞けなかったわけで、ツアーにはツアーの利点もあるものだと得心できたのも、大きな旅の収穫であった。

夜行列車

宮田直哉

夜明け、お前は海港を見たと言った。

スカンジナビアの車窓から、朝焼けにつつまれていく海港を見た。

夜眠る前に見た永遠の深さをもった星々と、優しい月の青さはもう影を失っていたが。

列車の揺れが心地よく朝のまどろみの中で幻想を見ているようだ、ちょうどこの地方に伝わる神話のように。

街の大聖堂は朝の鐘を鳴らす。それはお前のまどろみの中で響いていた。

ノーザンライツ

その頃お前がスカンジナビアの話をするのは決まって夜更けだった。

ランプの小さな明かりと、いい香りの湯気たつ紅茶が私を憧れへと誘ってくれた。それらは幼い頃つままれたあたたかな天使の翼のようだった。時おりランプが落とすふたつの影が揺れる。

——トナカイの橇の話

——何ひとつ音の聞こえぬ雪原の話

——サンタクロースの住む村の話

——オーロラの話

——その地方に伝わる妖精の話

ふたつの影が揺れる。

毎夜聞くそれらの話に小さな部屋の中は、私の夢見た神話に満たされていった。

そうして決まって紅茶が冷めるころ、お前はそつと神話の物語の本を閉ざした。

光の欠片かけら

服部
剛

僕の朗読会を取材してくれた

新聞記者が

突然、倒れて世を去った

彼の妻とも友人で

今朝、上野の珈琲店にいた僕は

スマートフォンで祈りの言葉を、送信した

僕がもし

地上に残された者の一人ならば

今日の舞台に立ち

何を語ろう

不忍しのばすの池いけの無数の蓮の葉群から

僕の頬を過ぎる

秋の夜風よ

教えておくれ

「日々は消化試合なんかじゃない」と

だから、僕は拾い集める、幾つもの場面

あんな場面

こんな場面

腐っちまった僕の場面

淡い日向ひなたの母と子の風景を

集め、飲みこみ、吐いて、吸って

そうして仲間たち一人ひとりの

リアルな顔は現われて

あなたの瞳の裏側の

光の欠片が

一瞬、視えた

照明灯

朝の古びた駅舎で

ペンキのはげた屋根の天井から
剥き出しの大きな電球が

辺りをそつと、照らしている

ひとり、ふたり

音も無く通り過ぎ

これから街へ出てゆく、私も

何者かに淡く照らされて

今を生きている



連翹忌通信(六)

「光太郎遺珠」その五

小山弘明

この連載では、数年前、新たに発見した高村光太郎の随筆「海の思出」（昭和十七年十月十五日発行『海運報国』第二巻第十号）について書いて参りました。これまで知られていた光太郎作品や、『高村光太郎全集』所収の年譜にない事実（と思われること）に関する記述を主に取り上げて参りましたが、今回は「書かれなかったこと」に着目したいと思います。

「海の思出」に書かれている事実は、主に二種類。まず、幼少年期の遠足や旅行で品川海岸や江ノ島を訪れたこと、そして明治三十九年から三年半にわたる海外留学での航海体験（横浜、バンクーバー、ニューヨーク、サザンプトン（英）、英仏海峡、イタリヤのベネチア、ロンドン、神戸）です。前者は話の枕的に短めの分量となっており、後者の方がメインの内容となっています。そして結びの部分では、「それらの記憶は今でもありありと眼の底に消えずに居る。私は海が実に好きだ。私は船に乗ると急に若くなる。」と述べています。

ところで、この文章が書かれた昭和十七年の時点で、光太郎はもう一度、長い船旅を経験しています。しかし、その件に関しては、一切触れられていません。その船旅とは、昭和六年、新聞『時事新報』の依頼で紀行文「三陸廻り」を書くために、宮城県、岩手県の三陸海岸を一ヶ月ほど訪れたものでした。

光太郎が東京を出発したのが八月九日（この日を記念して、光太郎の寄港地の一つ、宮城県女川町の「女川光太郎の会」さんが、毎年この日に「女川光太郎祭」を開催して下さっています）。九月十日には帰京しているようです。紀行文の新聞掲載は十月三日から二十七日まで、断続的

に全十回の連載でした。各回サブタイトルは「石巻」「牡鹿半島に沿って」「金華山」「雲のグロテスク」「女川港」「女川の一夜」「気仙沼」「夜の花」「釜石港」「宮古行」で、ほぼ光太郎が辿った行程に従って書かれていると思われれます（「ほぼ」については後述します）。その石巻（宮城県）から宮古（岩手県）まで百キロメートルを超えて北上する行程の間、一部で陸路を使ったこともありましたが、ほとんどは船での移動でした。しかし、この長い船旅の件が、随筆「海の思出」でまったく触れられていないのです。これはどうしたことでしょうか。

一つには「海の思出」が執筆された昭和十七年の時点では、まだ「思出」と言うほどには年月が経過していなかったということが考えられます。また、想像の域を出ませんが、留学時代の話で予定の紙幅を使い切ってしまった、割愛したとも考えられます。それにしても、一言も記述がないというのは合点が行きません。そこで、このように考えました。この「三陸廻り」の長い船旅は、あまり思い出したくない「思出」だったのではないかと。

『時事新報』に連載された紀行文を読むと、船旅自体は興味深い発見の連続でしたし、寄港地それぞれでも印象に残る体験をいろいろとしたことが綴られています。では、なぜ「あまり思い出したくない」と考えられるのか、といいますと、妻・智恵子とのからみです。

筑摩書房『高村光太郎全集』別巻の当会顧問・北川太一生作の光太郎年譜に拠れば、この船旅に関し「一か月あまり家を空けたのは結婚以来初めてだったが、智恵子の精神変調に気付いたのは、留守に智恵子に呼ばれてアトリエを訪れた母センや春子だった」とあります。「春子」は智恵子の姪。早世した妹・ミツの遺児です。看護師の資格を持ち、のちに南品川ゼームス坂病院に入院した智恵子の付き添いを務め、その最期を看取りました。

智恵子の故郷、福島県安達郡油井村（現・二本松市）に、智恵子の祖父・長沼次助が興した造り酒屋・長沼酒造は、智恵子の父・今朝吉の代になってますます隆盛し、有数の素封の弟があとを継いでから徐々に経営が傾き、昭和四年には恐慌や二本松大火のあおりを受け、倒産。土地家屋は人手に渡り、一家は離散します。智恵子はその件での心労や、もともと神経質・内向的な性格だったこと、俗世間と極力交渉を絶った光太郎との芸術精進の貧しい生活、しかし目指していた油絵画家として大成できなかったことなど、さまざまな要因が複雑に絡み合い、心の病を発症したと考えられます。その異状が顕在化したのが、光太郎が呑気に船旅を満喫していたまさにその間だったのです。あるいは智恵子自身、帰りたくても帰る場所がなくなつた「東北」に、光太郎が嬉々として旅立っていったことも、一つの要因に

なったのかも知れません。

その後、智恵子は翌昭和七年には睡眠薬を大量に服用しての自殺未遂、一命はとりとめたものの、完全に夢幻界の住人となってしまいました。同九年には、母・センや妹・セツが移り住んでいた千葉の九十九里浜に転地療養。しかし効果はなく、同十年にゼームス坂病院に入院、「奇跡」と称される千数百枚の紙絵を遺し、同十三年に歿しました。直接の死因は肺結核でした。

のち、光太郎は詩「梅酒」（昭和十五年）で、「七年の狂気は死んで終つた」と述懐しています。その七年間、光太郎は彫刻制作もままならず、変わり果てた愛妻と向き合う日々を送りました。その発端が、自分の「三陸廻り」の船旅の間だったわけです。牽強付会に過ぎるかもしれませんが、こうした苦い記憶から、随筆「海の思出」では「三陸廻り」の件に一切触れていないのではないのでしょうか。

ところで、「三陸廻り」の旅を深く知るために、光太郎が利用した当時の船舶運行业社「三陸汽船」のパンフレットを入手し、調べてみました。すると、さまざまなかが見えてきました。まず、主たる航路はほぼ光太郎が辿った通り、宮城県の塩竈が起点で（光太郎の船旅は隣接する石巻から）岩手県の宮古までであったこと、そして、月に二便のみ、東京芝浦港との間に直行便があったことです。

実は、東京と三陸間を光太郎がどのように移動したのか

分かっていません。これまで当方など、現代の感覚で漠然と鉄道を利用したのではないかと思ひこんでいました。実際、その可能性もあります。しかし、現代と違い、新幹線など無かった当時、鉄路を乗り継いで東京から石巻まで、また宮古から東京までというのは、かなりの難行だったはず。それならば、三陸への往復も、船を使った方が効率的だったのではないのでしょうか。

傍証は、当時、結核が悪化したため郷里の花巻で療養していた、この二年後に歿する宮澤賢治。賢治は敬愛する光太郎が三陸に赴いたことを知り、花巻まで足を伸ばして欲しいと懇願していたそうですが、光太郎の賢治訪問は実現しませんでした。これなども、光太郎が無礙に賢治の要請を断つたと考えるより、月二便しかない東京直行便の予定のため、と考えた方がしっくり来ます。

ところで、東京直行便、東京から三陸への便の最初の寄港地は、塩竈や石巻ではなく、気仙沼でした。もし光太郎がこの便を使ったとすると、いったん気仙沼で降船し、南の石巻まで戻ってから北上したことになり、「三陸廻り」の記述にはその点が伏せられていることになりました（前述の「ほぼ」はこの点です）。

今後、新たな書簡や文章等の発見により、この点が解明されることを希望しております。

（高村光太郎連翹忌運営委員会代表）

仏陀

北川光彦

老いと病と死、生きることは苦しみである
ゴータマ・シッタータは
その苦しみを消そうと思った

しかし、苦しみを感じない心は危険だ

感性和矛盾する心は拒絶される

拒絶するのは我^{ワタシ}

私は越えることのできないゼロの特異点

それなら、苦しむ心から無我の境地にジャンプして

特異点^{ワタシ}を迂回することで苦しみのない心^{ワタシ}に到ろう

そしてもういちど、すべてを悟りの心に包み込めば良い

万物普遍も嘘っぱちだ、輪廻転生も無限には続かない

諸行無常、あらゆるものは変化する

光明は無明を断つ、縁起を知れば苦しみの元を取り除ける

縁起を断つのは我^{ロコス}ではない、無我^{レンマ}の私だ

無我の私だけが、新たな苦しみを起こさず

苦を起こす縁起を断てる

無我とは私が無くなることではない

私が世界と一つになることだ

矛盾は矛盾のまま残し、

心が実体を包み込み、実体が心を包み込む

精神^{ココロ}と宇宙が一つになれる

菩提樹の下で、

釈迦はそう考えた

ハイパー仏陀

暴力が問題解決の手段であった時代

生老病死が思い通りにならず

生きることが苦しみであった時代に、宗教が生まれた

神は、人々の心を癒す方法を提供し

人々が従うべき理念を生み

人々が向かうべき目標を示した

宗教は、戦争を無くすことは出来なかったが

仲間を団結させ、文化を作り、そして

たくさんの人の心を救った

数千年を経て平和になり、飢えはなくなり

人々はスマホやインターネットで繋がり、誰でも、

世界の何処へでも短時間に移動できる時代が来た

病氣や死も克服する勢いと

指先ひとつで山をも動かす力を得た現在

昔の宗教は徐々にその存在理由を失っていった

しかし科学や経済では人の心は癒されなかった

宗教、科学、文化を超えて

人々を導く新しい思想が必要だった

もう神も仏も必要ではなかった

誰が「頭が良いか」などという競争も終わっていた
空には「緑色の太陽」が輝いていた

他を思い遣る想像力で

幼年期を卒業した人類は

力強く二本の足で立ち、歩いていた

1968年には、国家は共同幻想、恋愛は対幻想にすぎなかったが
20XX年、ある脳科学者が発明した新ノゾム・オルガスム機関によって
心レシマを機械へ移植することが可能になった

機械に心が宿るなら

人間同士の心の融合も、永遠の命も

夢ではなくなっていた



野沢一「木葉童子」復刻版に寄せて 木葉童子がいま 微笑んだ

佐相憲一

人類は森から出てきた。数百万年前の現在のアフリカにあった原生林。当然、人間の心の中の元型には、サルからつながる、あるいはもっと前の夜行性のねずみに似た小動物時代からつながる、そうした自然界のありようが反映しているだろう。だから、人間は文明社会のあらゆる状況のなかで、精神的な渴望が満たされていないと感じた時などに、森や山や海 of 自然風景のなかへ深呼吸をしに行きたくなるのだろう。

ここにご案内する木葉童子詩人は特にそういうことに敏感だった。自らを木の葉の童子と位置づけることは、この二一世紀のいまなら多数者の新鮮な共感を得たかもしれないが、一九〇四年（明治三七年）四月一日に生まれて一九四五年（昭和二〇年）六月三日に亡くなったこの人の時代背景では、奇跡に近い先駆者だった。歴史の教科書を紐解いてみれば、野澤一が生まれる一〇年前に日清戦争があり、生まれた年に日露戦争があり、一〇歳

の頃には第一次世界大戦、そして三〇代から四〇代は泥沼の一五年戦争（日中戦争、太平洋戦争）であった。国じゆうが軍事一色の時代、「男なら泣くな」「お国の為に死んで来い」「勇ましい詩を書け」というようなモードだ。

そんななかで、「ぼくは木の葉の童子です」などと書いてアリの語りかけ、コオロギに親しみ、湖で顔を洗って森の小屋で宇宙を感じとる野澤一は、個々の詩作品が親しみ深いだけでなく、詩想全体の方向性、人としての感じ方といった存在自体が当時、稀有だったと言えるだろう。「先駆者だなんて大げさだよ」という木の葉童子の声が聴こえてきそうだが、現代のわたしがそう感じるのは自由だろう。

「木葉童子」を「こつぱどうじ」と読むように作者は人に伝えたそうだが、詩集の中には「もくようどうじ」というルビが付いているところもある。前者「こつぱどうじ」の響きは、「こつぱみじん詩人」などとあだ名されそうだが、意外とこれは冗談ではなく的を得たところがあつて、彼の森の詩世界に照らされて、よからぬ方向へ突き進む文明自体が木っ端みじんに風刺されているような気もするからだ。また、後者の作者自ら一か所「もくようどうじ」とルビをふったところの響きからは、「木魚」でも叩きながらお経を唱える哲人詩人の姿も連

想される。しかも、詩集名ではこの「木葉童子」の下に「詩経」とあるから、東洋思想のはるか紀元前からの心のありようが古典的な響きで伝わってきそうなのである。「こっばどうじしきょう」とあらためて口に出してみる。そして、目次の後の口絵写真に写った二五歳の詩人を眺める。もうこれは奇人・変人ではさらさらなく、素朴なようでありながら実は深遠な生命共生思想をひっさげて、新たな古典ともいえる詩経を記した先駆的青年像だとわたしは感じるのだ。

今日の日本も世界も、地球環境のことが時代の一大テーマになって久しい。また、精神的困難を抱えた人びとの苦悩も一大テーマになっている。こんな二一世紀のいま、さりげなくわたしは、この八〇年以上も前に発表された詩集『木葉電子詩経』を差し出した。こころの繊細な人びとに特に差し出したい。

いきなりしよっぱなの詩で、木葉童子はこう告げる。

幾度生れ来るとも

それは二日とあり得ない

そして 又それは二人とあり得ない

たった二行の詩句はタイトルとあわせて、わたしたち

が生きてあることの真理そのものだ。いつときいつとき
のひとつひとつの存在と関係性の大切さが詩想の原点と
して記されている。森の隠者のような風貌をして、彼は
明るく澄んだ命の詩想に燃えているのだった。そして、
この人の詩には優しさが宿っている。

構えたところがなく、時に虫や小動物に語りかけ、時
に自らの寂しさや涙や夢想を赤裸々に告白し、かと思う
と哲理のような深い内省が語られる。その全体が、大人
のための童話のようなさりげない味わいを含んでいるの
である。

古今東西の生々流転思想に連なる人類的な視野があり
ながら、そこには作者独自のユーモアと寂しさそのもの
を受けとめる夢のありようなどが感じられて、ただはか
ないのだという無常観とも違うし、科学的な認識の冷た
い繰り返しでもない。すべてが流れているということを一
全身で感じとっているのだが、その雄大な流れの宇宙的
な視野にも関わらず、〈私もあなたも〉そのままの存在
で大丈夫なんだよ、楽しいことがいっぱいあるよ、とい
う、極めて気さくな日常的なところも同時に手放さない
この絶妙さ。「流音無終」などという老荘思想顔負けの
深遠なタイトルを付けながら、小さい者の日常生活や人
生を肯定する優しい人格が語りかけてくるのだった。こ
のような詩が、紀元前の原野時代や現代のコンピュー

ター万能時代に書かれるのなら、一方では人類の原風景的なものとして、他方では最新の地球環境共生思想の産物として、すぐに納得されるだろう。しかし、なんとこの詩が書かれたのは、あの大日本帝国軍国主義全盛の、あの時代なのだった。わたしにはそれが信じられないくらいに奇跡的で大きな救いに感じられる。戦前の日本の詩人にこんなにも突き抜けた命の詩想の先駆者がいたのだ。それも山梨県の奥深い四尾連湖の森で、その詩群は書かれたのだった。

次に、木葉童子の恋の夢想も目に付くが、それらはなかなか微笑ましい。現実の相手に投影されたものを崇め奉りその恋愛対象に嘆いたり告白したり葛藤したりするという近代詩や近代小説でおなじみの恋愛物語は二一世紀の汚れきった世の中ではむしろ初々しい新鮮さも感じさせるものだが、この詩集における恋い焦がれるものあらわれ方は、そういうものともまた違う。虫と戯れ、森羅万象に感嘆し、自然界のなかに自ら同化して生きようとする詩集の通底音に途中から、謎めいた心のなかの恋人が登場する。木葉童子の森の暮らしの情景や詩想展開のなかに、何気なく忽然と挿入された夢想の恋人だが、仙動物や虫や植物を語らううちに、その行為のただ中に、人間への恋しさを純化して、その魂の姿に語りかけていたようだ。だから、世にいう「世捨て人」とは

反対に、都会の雑踏を避けて森の暮らしを選択し実践することは、まさに本来の人間的なものを内側に回復させ、燃えるような希望をもって他者と心の友だちや恋人になることだったのだ。そういう独特の実践に浮かんだ幻影は、詩人の魂そのものが女性の姿をもって現れたとも言えるだろう。そうは言っても孤独な青年のいつか出会う運命の女性への悩ましい思いも赤裸々につづられていて共感を誘うが、同時にこの詩集に出てくる語り相手としての女性の影は、森の暮らして純化した詩人の心の深いところに出現した、普遍的な何かを感じさせるのも事実だ。また、素朴な具象として登場する幼少期の思い出の女の子や読書体験の中に出てきたかわいいこどもも、なんとなくそこに記されているというよりは、すべて木葉童子独特の旺盛な感覚がキャッチした、自らの魂の優しい側面の象徴、そしてそれは普遍的な人間相互の交感の象徴のように感じられる。

こうした感じも、明らかにほかの戦前の詩人たちの近代抒情や花鳥風月のありようとは違っていて驚かされる。なるほど、文体には文語的な、あるいは漢語的なものがあるが、その表現しているものはきわめて新しい。木葉童子にタイムマシンで会いに行けたとしたら、二〇一八年の自然環境や精神世界に繊細な人と十分に自然な感じで意気投合するに違いない。野澤一はあまりにも早く生

まれ過ぎたのかも知れない。

森の自然界に感じとつたものを展開しながら、人間存在にも迫る。その大きな視野と小さな視野のバランスが木葉童子の詩世界に豊かな実りをもたらしている。作者は自分自身を含めて文明化されすぎた人間を突き放し、その中から本来の人間のものを模索し、森と湖の生きものと植物の大きな世界を、ほかでもないその人間からの共感として表現している。この視点は、単に自然はいないでも人間はいないでもない、生きてあるこの不思議な縁の全体と個々のあらわれ自体をうたっている点でも、稀有な先駆詩人と言えよう。それは六年という歳月を森の小屋でひとり暮らした体験によるものであり、他の追隨を許さない迫力をもっている。

木葉童子は勉強家・読書家であった。この知的な詩集達成のもうひとつの精神的ルーツは、野澤一が自然発生的に限定された意識や無意識だけに頼る書き手ではなく、古今東西のさまざまな文人・芸術家・思想家・偉人・宗教家などの遺した心の遺産をひたむきかつどん欲に吸収し、得たものを己の血肉にしたものでもあるのだ。この詩集の中に具体的な名前前で出てくる先達の顔ぶれは多彩だ。木葉童子は本を読み、まるで一対一でその著者と対面しているような熱い心で対話し、自分の糧にしている。こうした真摯な姿勢は、後にこの詩集がきっかけになっ

て文通することになった詩人・高村光太郎への熱い手紙の伝説にもあらわれている。野澤一の詩世界が誇大妄想にならずに読者に説得力をもつのは、文体や書くスタイルや心の向きどころを自らの中に閉じ込めずに、絶えず世界文学や世界思想、世界芸術や世界生活の中に置いてあるからであろう。森の自然界から学ぶのと同じく、その熱意をもって、書物の森からも学ぶ詩人であった。その知的なありようが、現代の読者にも作品の中から伝わってきて、文学的にも手ごたえのある詩集にしている。

森の詩人は湖と川を通して海に出た。世界の海、心の海、そして人生の海である。その後の木葉童子は再び街へ出て、家庭を築き、病に倒れるまで真摯に生きた。そして、人びとと詩の心でふれあった。暗い時代ではあったが、詩人の内海にはいつもあの湖があり、あの森の小屋があり、小動物と自然界があった。そして、この夢の漁夫は、一冊の詩集『木葉童子詩経』を世に遺すことによって、次の世紀の読者の胸に、釣り上げた豊かな糧と、木の葉の童子の優しいささやきを贈ってくれた。それがこの待望の復刻版である。

この復刻版の刊行によって、いま初めて野澤一の詩に触れる広範な層の読者と、『木葉童子詩経』の地球生命的な詩世界を共に味わうことが可能となった。その喜びにわたしても感謝したい。

最後に、詩人・野澤一の御子息・俊之氏がわたしに語った言葉をお伝えしよう。

「戦争が個々の人間の温かな生活をないがしろにしたことに、強い憤りを感じない訳にはいきません。

出征しなかった一般市民も、疎開や軍事訓練等によって無理がたたり、身体を蝕まれたということですよ。結果的に、父は甲府の清楽荘で結核により亡くなりました。寿命を早めたこと、戦災と疎開による『木葉童子詩経』以降の原稿の消失、保管先での管理の不行き届きによる破損等、戦争さえなかったならば、との思いは強くあります。母はよく言っていました。「作品を二度と取り戻すことができない。」高村光太郎の千駄木の家の焼失についてもしっかりです。戦争がなければ、二百通余りの手紙が残っていた事でしょう。

戦争がなく、もう少し長生きしていれば、それなりに良いものを書き、多少は世に認められる存在となつただろう、と父をよく知っている何人かの方に言われたこともありました。たとえそうでなくても、本人は創作活動を続けて、人に感動や影響を与える作品を生み出していたということも想像できます。あまりにも早い死が、遺族にとつては残念であります。現在もお、世界中のどこかで、戦争が起り続けていることは残念なことですよ。何の罪もない市民一人ひとりの幸せな暮らしがあるとい

うことを想像することが大切だと思います。つらい過去の上に、今のわたしたちの生活があることも忘れてはならないと思つています。

自然と人をこよなく愛し、ひたすらに純粋で、人懐っこいところがあつて、誠に童子そのものであつた人間が、今の世でどのような立ち位置でいるのか、興味があるところですよ。」

野澤一は終戦の二か月前、結核によつて四一歳で亡くなった。俊之氏が述べているのは、詩集『木葉童子詩経』が世に出た一九三四年から後の、十年以上の間に書かれた作品群の行方についてだ。その点は、わたしたち現代の読者にとつて共通の悲しみだろう。

木葉童子のような優しい生命観、豊かな世界観をないがしろにするような方向に、二度とこの国が向かわないことを願うばかりだ。

だが、いまは何といつても、ここに、かの『木葉童子詩経』が甦り、二一世紀の世に復刻版というかたちでそっくりそのまま届けられたということを喜びたい。この伝説の詩集の心が、いまの世を生きる人びと、これまで苦勞して生きてこられた人びと、これからの世を生きる人びとに、ひろく深く響くことを願う。

木葉童子詩人よ、あなたの森は確かにいまも生きています。

(詩人・編集者)

ヨハンナ ゼーブス（ゲートル）

訳詩 勝畑 耕一

ブリーネン村の一七歳の健気な少女

その思い出のために

1809年1月13日、

ライン河の水解でクレファハムの堤防が決壊し、
村人を助けようとして死んだ少女

堤防は裂けて野原は雄叫びをあげる

濁流は押し流れ、その波は怒り狂う

お母さん、おぶって渡りますね

流れは、まだ深くはないし、私なら大丈夫よー

お隣なのだから私達もお願いします

困ったことに、子供が三人もいるのです！

私達にはもう手立てがありません、それなのにあなたは――
母を背負い流れの中を彼女は歩きはじめ

丘のところまで行ってください、

その間に私戻ってきますから

そこで待っててください、そうすれば皆無事に助かります

丘にはまだ水が来ていないし、もう少し歩けば大丈夫ですよ

それなら、うちの山羊もお願いします

堤防が崩れ落ちる 田畑は雄叫びをあげる

大きな濁流は岸辺をえぐり 波は荒れ狂う

母を安全な場所におろし

また波の中を戻っていく健気な少女

何処へ行くのか何処へ、川幅は大きく広がっているのに

もうどこにも、向こう岸まで濁流は溢れて

深みにはまったらひとたまりもないよ！

でも（約束してるから）助けに行かなければ！

波が轟き 堤防は沈んでしまった

海のような大きな波が野を揺らし怒りはじめ

少女は通いなれた野道を

押し寄せる流れに足をふみ外さないように

隣のおばさんが待つ丘へむかう

けれども その母と三人の子にもうすべはない！

堤防が崩れ落ち、海が轟くようだ

小さな丘を雄叫びをあげて波が取り囲む

突然ぱっくりと、渦を巻いた大きな深淵ができ

子供と母親をその中に引きずり込む

山羊も角をつかまれその中へ

すべてが、あつというまに一瞬にして消えて行った！

美しい少女は一人 まだしっかりと立っている

気心の優しいこの娘を救える者はどこにもいないのか！

美しい少女は、星であるかのようにまだ立っている

助けようとしてもあまりに遠く誰もたどりつけない

助けようとする者はもうどこにもいない！

周囲の流れは増して漕ぎ寄る船はどこにもない

少女はもう一度天を振り仰ぐ

その瞬間になめらかな波が少女をさらっていく

堤防はもう影も形もない、野畑は全く見えず

ただ塔や樹の先端だけがその位置を指し示す

全てが濁流の底に沈み果てた

だがいたるところに漂う少女の面影――

水が引きはじめ大地が姿をみせる頃

(村や町の) いたるところで少女を悼んで泣く声が――

歌や音楽の才能があつて語り継ごうとしないなら、

そんな者にはこれから一切関わり合うな！

*

村人を深く悲しませた感動的な事件、ナポレオン治世下の

1809年1月、隣人を救おうと洪水のために命を落とした少女。地元の地方長官が書いた記事を読んだ女性がゲ

テに詩(バラード)にしてほしいと懇願した。詩は5月に

は長官に届き公にされ、友人のツェルターがカンタータに

作曲、シューベルトも歌曲にしている。顕彰碑はフランス

語でかかれ、近年まで名を冠した女子高校があった。

詩歌三評

神西清全詩集に寄せて

神西清・年譜的素描

勝畑 耕一

明治三十六年（1903）神西清は東京市牛込区袋町、現在の神楽坂に生まれた。官吏だった父の転勤で国内を転々とし家族で台湾へと渡ったが、台北で父をアメリバ赤痢で亡くした。これが幼児での最初の転機といえる。

日本に戻り三年後、十一歳の時に母が再婚、叔母に預けられる。ついで麴町（現千代田区）番町小学校から府立第四中学（現・戸山高校）へ進学。ここで同級となったのが『ビルマの竖琴』の竹山道雄だ。ついで旧第一高等学校（東大）の理科甲類に入学。この頃の愛読書は荷風と朔太郎。そしてこの寮で一歳下、理科乙類に入学してきた終生の親友、堀辰雄を識る。堀の同学年には小

林秀雄や深田久弥がいた。辰年に麴町で生まれた堀だがその出自は複雑だ。広島に正妻のいた父・浜之助は、嫡子がおらず東京で側室？の志気に生ませた辰雄を養子として育てるつもりだった。しかし正妻が上京し同居するというので志気は二歳の辰雄を連れて妹宅に家出、二年後に再婚した。更に二年後には浜之助が亡くなり、その遺族がもらうべき恩給を、母志気は辰雄の学費にあてていたという。つまり神西と堀、二人は麴町で幼少期を過ごし、その境遇にはまっとうな家族愛からは遠い、幼年期の日々があった。しかも堀は数学を愛し、神西は当初、建築家志望で、二人は理系から転身して文学の道に向かったのであった。

堀辰雄と神西、二人の戦前までの履歴を追ってみよう。戦後は神西の年譜事項。カッコ内は神西の年齢である。

大正十四年（23）

神西、六年間在籍した第一高等学校を中退して外語大ロシア文学に入学。この間にフランス語を習得

昭和元年（24）

神西、竹山・堀らと同人雑誌「箒」を発行。

昭和二年（25）

神西、詩の連作「鎌倉の女」を発表

堀、室生犀星とともに師と仰ぐ芥川龍之介が自死。

昭和三年（26）

神西、外語大を卒業し北大図書館に勤務。神西らの同人誌『虹』が小林秀雄、永井龍

昭和四年 (27) 男、河上徹太郎らの『山繭』と合流。
神西、ソ連通商部に転職。

昭和五年 (28) 堀、卒論に芥川を選ぶ。
神西、この頃はフランス語の翻訳が多い。
神西「恢復期」

昭和六年 (29) 堀、川端康成を知る。短編集『聖家族』発表。
神西、田辺百合(子)と結婚、(仲人は竹山道雄夫妻?)母死去。義父死去。

堀、長野富士見高原で療養、堀も「恢復期」
をかく。

昭和七年 (30) 神西、ソ連通商部を退職、堀との友情は深まる。

昭和八年 (31) 神西、小説集『垂水』発表。この年より堀について20編の評論を発表する。

昭和九年 (32) 堀、立原道造を知る。中編集『美しい村』
神西、川端康成についてのエッセイ。
翻訳はこの年以後ロシア語中心となる。

鎌倉に転居。

堀、『風立ちぬ』のモデル矢野綾子と婚約。
神西、再度ソ連通商部に勤務。

昭和一〇年 (33) 堀、矢野綾子死去。
神西、長女敦子誕生。自伝小説『母たち』

年末、小林秀雄がその寝顔を見に訪れる。
ソ連通商部を辞職。

昭和一三年 (36) 神西、翻訳により池谷信三郎賞。

堀、加藤多恵と結婚。(媒酌人 室生犀星
夫妻)

昭和一四年 (37)

立原道造、二四歳で死去。
秋に神西と堀、奈良へ旅行。

昭和一五年 (38)

神西、次女絃子誕生。妻百合が長期に病み、
仕事はわずかな翻訳のみとなる。

昭和一六年 (39)

堀『菜穂子』発表。

昭和一七年 (40)

神西、東亜研究員として満州北を巡歴。
短編集『垂水』を刊行。

昭和二〇年 (43)

敗戦により東亜研究所解散、鎌倉での文
士生活始まる。

昭和二二年 (44)

小説集『雪の宿り』『灰色の眼の女』
堀を介して折口信夫、角川源義との交友
が始まる。

昭和二三年 (44)

年末、角川家での忘年会に参加、泊まる
元旦、角川が年始の挨拶のため鎌倉へ。

昭和二四年 (45)

翌二日、吉田健一・中村光夫がウイスキー
持参で神西宅に来訪、三人で大佛次郎宅
へ出向き、今度は四人で竹山道雄宅へ。

昭和二五年 (48)

鎌倉文士たちの交友が拡がる。

昭和二三年 (46)

神西、評論集『詩と小説のあいだ』、小説集
『恢復期』を角川書店より出版。

昭和二四年 (47)

夏に鎌倉夏季大学や鎌倉アカデミアで講
義をする。

昭和二五年 (48)

「病床の友へ」(堀辰雄)

「飯面と告白と」(三島由紀夫)
岸田國士の演劇団体「雲の会」の会員とな

昭和二六年(49)

る。角川源義の結婚に際し仲人をする。
自伝小説「少年」発表。

昭和二七年(50)

「ナルシシズムの運命 三島由紀夫論」発表。
『ロシア文学史』(文庫クセジュ)刊行。
これまでの翻訳の仕事で文部大臣賞を受ける。

昭和二八年(51)

自伝小説「地獄」(三部作完結)
堀辰雄死去、葬儀委員長川端康成。
折口信夫死去。

昭和二九年(52)

朝日に文芸時評を連載。
チェーホフ四大戯曲の翻訳完成。
神西訳『どん底』のけいこ中に、岸田國士が急死。

昭和三十年(53)

吉田健一、川端よりアメリカ留学を勧められ推薦状をもらう。(英文・和文)
前年暮より健康を害す。
秋、口内に異常が見つかる。
『少年』(自伝小説三部作をまとめたもの)刊。年末、大塚癌研究所付属病院に入院、リンパ腺手術。

昭和三一年(54)

退院したが通院して放射線治療を受ける。
明治大学文学部講師となるが出講できず。
三月、舌癌により死去。鎌倉東慶寺に葬られる。

昭和三二年(55)

二十歳前半のフランス語の習得からロシア語への転機、英語圏の文学や詩にも詳しく神西が何を目指していたの

か、それが大切な問題点だ。更に昭和一八、一九年の日記が公刊されている。その読み込みは今後の課題となろう。

敗戦の後、神西の前に現れた二人、一人は折口信夫の教え子で、出版社を立ち上げようという角川源義、もう一人は学習院から東大法学部を出たばかりの作家志望の秀才、三島由紀夫である。その二人を交え戦後の鎌倉での文士生活は一気に加速する。

角川は自宅の応接間を事務所にして角川書店を立ち上げた。昭和二一年、その時すでに堀に(折口信夫を介して)手紙を書き、それがすぐさま角川書店でその後六年間に堀の作品集や小品集を八冊刊行してゆくことになる。つまり無名の出版社にブランドを与え知名度を上げることに堀は積極的に関わったのである。堀の親友である神西もこの年に折口と知りあい、角川との付き合いは即座に始まったようだ。文学で意気投合し角川宅に泊まり込むことも度々あり、ついには昭和二五年、結婚する角川の仲人まで引き受けているのである。

しかし角川とのこの蜜月は長くは続かず、堀亡き後の堀辰雄全集は角川書店ではなく新潮社から出ることになった。

昭和二八年、五月に堀が亡くなった。神西の哀しみはどれほどであったろうか。それからすぐ神西は堀辰雄全集をまとめる刊行委員を引き受け、その結果全精力をそ



昭和15年11月 於東京
妻・百合 神西清 次女・絃子
長女・敦子

ちらに傾け、自分の本来の仕事をする時間が限られてしまった。昭和二十九年、この年はチェーホフ没後五〇年、『かもめ』をはじめとする四大戯曲を訳し終え、年下の福永武彦から「神西さん、自分の創作にも時間を割いたらどうですか」といわれたという。更にこの年、吉田健一と当時のペンクラブ会長の川端により、翌年のアメリカ留学の候補として推薦を受けている。神西本人もアメリカ大使館との折衝もしているが、病のため断念したとされる。

三島の年譜によると昭和二十一年、戦後すぐに鎌倉の川端康成を訪ねている。神西と川端は旧知の間柄だから、その縁で三島は神西を知ったのかもしれない。二〇代の三島に対して三編の評論をかいていて、若い俊英を育て

よう、というていねいな文である。このことすでに三島に対する神西の高い評価がうかがえる。

さて二人を更に結び付けたのは「鉢の木会」であった。昭和二十四年に中村光夫、吉田健一、福田恆存等が企画した会で、すぐに吉川逸治、神西清、三島由紀夫、大岡昇平も加わった。ドナルドキーンも混じった三島邸での写真が残っている。神西が亡くなる丁度二年前である。神西没後に三島は自著の単行本二十八冊を神西家にサイン入りで送っており、どれほど神西を敬慕していたかがうかがわれる。海外旅行のお土産に、長女の敦子さんは三島からペンダントを贈られている。そして昭和四六年、三島由紀夫の葬儀委員長は川端康成だった。

* * *

神西清全集全六巻は弊社・文治堂書店から刊行された。ケース入りで各巻合計の総頁数は三〇〇〇を超える。当初は年に一巻で順調だったがその後資金繰りが滞り、通算一四年を要している。神西を敬愛する遠藤周作がその遅延に対して、一体どうしたんですか、と不服そうに文治堂書店を訪れてきたという。編集委員、編纂に加わった誰一人として渡辺さんに遅延への文句を言っていないのは良き時代だったということだろうか？
古いノートを見ていたら、渡辺文治さんから聞き書き

をした全集立ち上げの際のメモが出てきた。銀座の「岡田」（おかだ？）という割烹で編集会議を催したという。

集まったメンバーが川端康成、小林秀雄、竹山道雄、中村光夫、そして三島由紀夫、なんとという豪華メンバー！

欠席は中村眞一郎と福永武彦。渡辺文治さんは百合未亡人が会議（宴会）を仕切るのを横目で見て、おんぶにだっこだったよ、と笑いながら私に言っていた。それはきつと一回目の配本を前にした一九六一年前後の事だろう。その後は編集方針をまとめるために鎌倉の川端邸、小林邸、神西邸を渡辺さんは度々訪れている。そしてその縁で福永武彦と小林秀雄の本も出しているのだ。

神西は二つの賞をとっている。昭和一三年にロシアの作家ガルシンのなどの翻訳により池谷信三郎賞を、昭和二七年に『ブアーニヤ伯父さん』の翻訳で文部大臣賞をとくに生涯強い絆で結ばれていた堀辰雄との結びつき、創作と翻訳との関係、神西の生きた密度の濃さは様々な面で今後の評価が待たれると思う。ロシア語の翻訳の力量と真摯な創作への態度、これは二葉亭四迷につぐものではないだろうか。神西清を名翻訳家、ロシア文学者としてのみ文学史に埋もれさせてはいけないと思う。



1955年（昭和30年2月）目黒区緑ヶ丘の三島宅にて。
左より大岡昇平、三島由紀夫、吉田健一、ドナルド・キーン、吉川逸治、神西清、福田恆存。

詩人・神西清を再発見する

望月苑巳

昭和39年に文治堂書店から発行された神西清全集（全6巻）は、編纂が川端康成、小林秀雄、竹山道雄、中村光夫、中村真一郎、福永武彦、三島由紀夫という豪華メンバーだ。

ロシア文学者、あるいは小説家、文芸評論家として名を成すが、個人的には詩人としてもっと評価されていいのではないかと考える。チェーホフ全集翻訳の道半ばで舌癌のために53歳という若さで亡くなっている。というわけで彼の創作活動は詩だけにとどまらず、その業績は多岐にわたるが、ここでは詩について語ろうと思う。

彼の詩の作品のほとんどはこの全集の第1巻に収められている。文語体と口語体が入り混じっているが、つまり時代の転換期にあることが分かる。

その中でも注目すべきは、神西の感性と詩の構造が立原道造とよく似ていることに驚く。これはたまたまだったのだろうか。例えば「希蠟牧童の詩」という作品を見ればそれが明らかだ。

パアンよ

また をかした恰好のフォーヌよ

おまへたちは

よく来てくれた。

けれど、おまへたち

おまへたちの来るのは

あんまり おそかった

僕まで 睡くなるほど！

僕の手のアカンザスは

御覧！ よつぼど待ち疲（くた）びれたと見えて

まあ

こんなによく眠ってしまった！

パアンよ

をかした恰好のフォーヌよ

もう森にかへつておいで

また あしたのお午（ひる）まで。

この詩は1921年の作だから、立原が府立三中（現・都立両国高校）在学中に作った詩集「こかげ」が1932年であることを考えれば、神西の方が一足早い

ことになる。ちなみに神西は1903年の生まれ、立原は1914年で一回り違う。

もう1編挙げよう。「誰」という詩には「あいさつ」という副題がついている。

誰
私の心に？

初夏の夕べ

涼やかな、けれど

甘い薫りを

私の胸ふかくに

涌きたたせるひとは。…

ああ、伏眼がちの瞳の

薔薇の繁みに

仄みえるとき。…

たそがれの

柴折戸にかくれて

しとやかに

あいさつをするひと。…

誰

私の心に？

やはり叙情の系譜が同じだと思う。

逆に考えれば神西は、立原の師である堀辰雄や三好達治らとも交友関係があったのだから神西の詩を立原が読んでいないはずはないと考えるのはうがちすぎだろうか。人間関係における影響というものがどう作用するのかそう考えると面白い。では立原道造の詩を並べてみよう。詩集「優しき歌」から「序の歌」。

しずかな歌よ ゆるやかに

おまへは どこから 来て

どこへ 私を過ぎて

消えて 行く？

夕映が一日を終らせよう

と するときに――

星が 力なく 空にみち

かすかに囁きはじめるときに

そして 高まつて むせび泣く

絃のうちの どこに 住む？

それをどうして おまへのうちに

私は かへそう 夜ふかく

明るい闇の みちるときに？

その類似性は顕著であるだろう。言うまでもないことだが、ここではそれを指摘するにとどめておく。

さて神西に戻ろう。「痛める胸」という連作ではⅠ、Ⅱが口語でありながらⅢ、Ⅳでは文語体、そしてⅤで口語、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷで再び文語にとチャンポンなっている。これはなぜなのだろう。統一性を完全に無視しているという謎が残るが、時間をおいて書かれたからだというだけでは解決しない。それは今後、専門の研究者にお任せしよう。

Ⅲ

森の影

歩めばかなし

登おとは

われただひとり

わがひだり

よりそひあゆむ

君の気はひに：

はかなく ふり返れば

み姿はなし

ああ わびし

きみはいづこに

笑みておはすや

われひとり

この森かげに

今し 泣く：

神西が口語体と文語体に対してどう考えていたのか。

それは、とりわけ全集第1巻の付録（昭和24年の「表現」7月号に掲載）を読み解くと興味深い事柄が分かってくる。これは釋迢空、日夏耿之助、三好達治、と神西の四人が座談会をしているものだ。

その中で神西は「古語といふものが単に傳統の上に安固として坐してゐるといふふうに説明すべきではなくて、却つて現代語といふものが、言葉を成してゐない言葉として、うやむやに成立してゐる爲ぢやないかと思われまゝす。私のらんぼうな持論ですが、現代日本語は成立してゐない。つまり成立する暇がないほど毎日毎日のたつきに追われている。（中略）まあ一口にいってしまへば、

言葉でない言語——さういふふうには現代口語といふものを考へちやいけないのですかしら」といい、これに対して三好達治が「神西さんのいはれることは、大體わかりますがね」と答えている。

さらに「われわれの散文精神といふものは、新聞精神とか新聞用語といふものに押し流されてしまふことになる。散文は勿論のことですが、詩までが三面記事的なものに食はれてしまふといふのが現状ぢやないかと思ふのです。まったく飛んだレアリズムです」と口語体に対して辛辣な批判をしている。

では例に挙げた口語詩は神西の中では単なる実験だったのだろうか。しかし同時に迎合的な現代語を「飛んだレアリズムだ」と断言しているこのことから、口語と現代語とを区別していることが分かる。

ここでは二人の詩の類似性について問題提起しただけなので、それ以上の詮索はやめよう。「万葉とか新古今の時代は、形式は今の詩に比べるとずっと貧しいと思うが、響きはあつた」といった神西の見識は正しいといえるだろう。

結論を述べるなら、神西の資質が印象派乃至は叙情派的感性の持ち主だったことは明白であり、立原道造に影響を与えたと考えることにやぶさかではない。これから再評価されて欲しい詩人ではある。

詩人の園へようこそ

前木久里子

その詩人の名は神西清、神西と書いて「じんざい」と読む。神に背いたカインが逃げたのはエデンの東だったが、この名は正反対の西。偶然にも暗示的で面白い。1903年11月15日、官吏の息子として東京に生まれるも、父の転勤に伴って日本各地を転々と漂泊する。台湾で日本人学校に通っていたこともある。内気だった少年は中学時代に文学に目覚め、萩原朔太郎の「月に吠える」から詩に興味を持つようになったらしい。高校時代には、同時代の中原中也と同じくフランス象徴詩に傾倒し、21歳で作品を発表し始めた。若い時分から堀辰雄や三島由紀夫と交流を持ち、チエーホフなど露文の翻訳者として知られているが、元々は小説や戯曲や詩を書いていたのだ。文治堂により出版された「神西清全集 第一巻」の中には、彼自ら選別して編んだ詩集の臺本が収められている（詩の部の扉裏には、己に正直に厳選したと述べてあり、他にはこのような但し書きがないことから、彼にとつて詩が特別であったことが伺える）。完全主義で知られた神西氏は、この本でも各詩に創作年月

日を記し、時系列に並べている。それらは1918年から1927年まで創作年毎に纏められており、満14歳から23歳までの彼の詩の推移をつぶさに辿ることが出来るのだ。

「暴風」に始まる1918年の作品群は、14歳とは思えぬような豊かな語彙と多様な文体に溢れているが、同時に14歳の少年らしい美少女への憧れも素直に表現されている。女友達が欲しいと望めど口に出せない内気な少年。別の書では「級友が幸福極まる異人種に見えた」とこぼしており、今風に言うならリア充に違和感を抱く草食系男子だったのかもしれない。それから数年間は、わびしさびしと溜息をつきながら言葉のレースを編むように繊細な詩を書き連ねていた神西少年であったが、17歳の時に書いた「北海道を想ふ」で突然、感嘆符を酷使しながら熱き血を滾らせるガテン系開拓者と化する（よほど北海道に思い入れがあったのか、この7年後には北海道大学図書館に1年間務めている）。また、この年以降から急に「聖母マリヤ」「十字架」「ユダ」といったキリスト教用語を繰り返しているが、クリスチャンとの交友でもあったのだろうか（約20年後には、遠藤周作を世に出すきっかけを作っている）。何はともあれ、少年期から青年期へと明らかな変化が見られる時期である。

続く1922年は豊作だ。量的にも26篇と最も多くの詩が選出されているし、私の主観ではあるが質的にも優れた作品が多いように思う。また、この全集の中では唯一の英詩も綴られている。この18、19歳の頃、きっと神西氏は詩人として充実していたのだろう。この年に生まれた詩には、私の心に響いた数々のパンチラインがある。私が一番好きなのは「郷土行路」という作品だ。まずはフランス語で「自分の故郷を離れ、母国に帰る」という意味の引用文が始まる。幼き日に転居を繰り返した彼にとって「心の郷土」とは、一体どこだったのだろう。そして中盤で、「あまり見慣れたものにならずに、私に初めて『生』を見ようとする」という一文にぶつかり、思わず身震いした。「見慣れたものに生を見ようとする」——これこそ詩の真髄ではなからうか。

その後は詩作のペースが落ちたのか、はたまた他の創作に忙しかったのか、この詩集に選ばれた作品の数は年々減少している。そして、目次の「1925年に詩作を缺く」の言葉通り、その一年間はプツリと詩の掲載が途絶えてしまう。奇しくもこれは、同人誌「箒」に小説や戯曲や詩を発表し始めたのと同じ年である。それから後の2年間に書かれた10作品と、年代未詳カテゴリーの10作品で、詩の部の幕は閉じられる。続いて、短歌、戯曲、そして小説が「神西清全集 第1巻」に収められ

ている。「神西清全集」は全部で第6巻まで出版されており、その殆どを占めているのが小説と文芸評論だ。だが、彼が手掛けた翻訳物の量は、著作物のそれを圧倒的に上回る。出版物を単純に数字で計算するなら、神西清とは7割方は翻訳家であり、あとはほぼ小説家と文芸評論家であったと要約できるだろう。詩人といふべき割合は少ない。だが、神西氏の詩を読めば、彼が真正正銘の詩人であったことは明らかで、むしろ彼の原点は詩であつたように思われる。その欧風な舞台描写、細やかな色彩感覚、四季を愛でる心、そして品のある語彙と語り口は、その他の分野の作品にも随所に見られ、同じような心地よい後味を残してくれる。

「神西清全集」の幕開けとなつたこの詩集の中に、私は詩人の園を見る。「私の果樹園」に代表されるように、彼には園や樹を謳つた作品が多い。エデンの園ならぬ、詩の園である。そこで私は畏れ多くも、神西氏の詩人人生の最初から一年毎に一行ずつ詩を拝借し、新たな詩の構築を試みた。そこには、一人の少年詩人が成長し、青年期の悩みを経て、己の詩の園と共に成熟した文学者になつていく様が伺える。継ぎ接ぎ感是否めないが、神西清という知られざる詩人の園への入り口になれば、幸いである。

詩の園

ここに植ゑてあるのは 私の詩の樹 (14歳)
この鎖されし後園に 忍び入りにし (15歳)

桐の花の 散れるを見たり (16歳)

古園にありて心樂します (17歳)

あまり見慣れたものすら

初めて「生」を見やうとする (18歳)

これが涙の朽葉、さてこれが思考の病葉 (19歳)

年老いた榊樹の蔭は子供らの王国である (20歳)

樹の葉はしつとり濡れてゐる (22歳)

潤い葉をもつた樹立がどこまでもつづいてゐる

(23歳)

神西清への手紙

服部 剛

その詩に出逢ったのは、神奈川近代文学館であった。硝子越しに展示されていたのは、在りし日の堀辰雄が神西清に贈った直筆の詩である。堀にとつて学生の頃から親友であり詩人でもある神西への言葉にならない敬意を、その詩は語っていた。そして、その詩には、西洋の詩の感覚と、日本古来の言葉を神西の詩才により統^すべる作品を書いてほしいという、堀の願いが込められていた。神西も、「堀辰雄への手紙」で、堀が白い花を好んで書いたことを日本的だと言ひ、文学における東洋的な「無」の感覚と「神の不在」について思索している。「君は横たえた頭をゲーテの園にあずけつつ、その足さき^もを以てついに芭蕉の「この一すじ」につながっているのか」という言葉は、神西と堀の間で語られたテーマを物語っている。

この東洋と西洋というテーマは、神西が才能を見出し、堀が編集する「四季」に「神々と神と」という処女作を掲載したカトリック作家・遠藤周作の生涯のテーマになつてゆく。堀がキリスト教を背景とした西洋文学に親しみながら、キリスト教を己の裡に吸収できなかつたこ

とを踏まえ、西洋の一神教の感覚が日本人の心に受け入れられないことに気づいていた遠藤は、代表作「沈黙」をはじめとする作品で「母なるゆるしの神」という宗教観を確立してゆく。

私は、考える。(遠藤周作は「東洋と西洋と信仰」というテーマを小説として書き残したが、詩においてその課題はまだ残されているのではなからうか?)と。その問いのヒントを探して、私は、神西清の詩の世界を辿つた。

* * *

『神西清全集』(文治堂書店)の第一巻に掲載された詩を年代順に読むと、神西清の詩の世界のイメージが浮かんでくる。詩を書き始めた十四歳から十七歳にかけては、恋への憧れや感傷を綴る詩と、秋の詩が多い。その後も恋や秋の詩はあるが、神西が書いた約九年間の詩群を通して流れているのは、その詩的靈感である。

秋の日の

まばゆくも悲しき光のもとに

遙か、とほき野路の果

ああ 紅き

君がばらそるを見ぬ。

うち騒ぐ胸をおさへて

落葉 踏み

野路を急げば

うすむらさき

ぱらそるは消え

木犀の花 秋風に ただ

しきり匂へる。

「秋の真昼」

もし、人生というものが夢ならば、恋の季節はなおのこと幻の如きものであろう。秋の光と金木犀の薫りの向こうに消えてゆく女の面影を通して、詩人はこの世の夢を語っているのであろう。

音もなく訪れ

音もなく消えていった影

きみよ

この午さがり。

音もなく訪れ

音もなく消えていった影

夕闇にひらく

花のよう

匂やかな

薫りのみ

わが書物のうへ

陰影をゑがく

「来訪」

この詩は「秋の真昼」に通じる感覚で、目に見える日常世界において、ふいに詩人に訪れる靈感（インスピレーション）があることを語っている。それは、親友・堀が亡き恋人の存在を想い、文学の次元に深めて描いた小説「風立ちぬ」の「風」が、時に死者の想いとして吹く——という直観と通じている。

やがて神西は、この世の悲嘆や、自らのなかに潜む罪と汚れをみつめ、詩人の視力でより深い領域を描いてゆく。

ああ、みづから犯した罪のゆゑ孤愁の私、

いま、身に着くる綾羅のゆゑ淋しい私、

ああ、貧瘦のすがたえ堪えぬゆゑに

夜更けの街路をさまよふ私。

ふと、この身、雨の気はひを感じて

見あぐる

くらい夜ぞら、たかく、たかく、ああたかく、

石造建築の第七層の窓から

しょんぼりと

つるさがつてゐる、一つのたよらない孤燈^{あかり}。

「懺悔」

大人になってゆく過程で自らのなかにある罪の存在に
気づき、うつむいて夜の街を歩く。その時、見上げたビ
ルの窓に見えた（たよらない孤燈）——これは、後に遠
藤周作が描く「無力なイエス像」や「哀しみの連帯」と
いうテーマになるものを想起させる。

人間の本性に根ざしてゐる

永遠につきない悩みを君は知るか。

そしてそれを知るひとにのみ啓はされる

意味ぶかい息づきを。

人の魂は深い。自然はその殿堂だ。君よ。

君は眼醒めねばならない。

「寄」(2) (部分引用)

世に出る前の若き遠藤はフランス留学中、無人の教会
に入り、文学者として真理を求める勇気を願ひ、祈った

という。この「寄」(2)で語られる言葉は、そんな遠
藤の願いと重なるような気がしてならない。

これらの詩を遠藤が思い出して小説を書いたというよ
りも、自分にとって恩のある詩人が書いた詩を、文学の
勉強に精を出していた遠藤は読んでいたのではないか。
その無意識下にある影響が、後の小説のなかに表れて
いったことは、充分に考えられる。

私は今、神西清・堀辰雄・遠藤周作という三人を結ぶ
縁の糸を、思い巡らせている。カトリック作家・遠藤周
作は神西清に見出され、師の堀辰雄を敬いながらも、師
が辿り着かなかった「東洋と西洋の間にあるもの」を書
いた。私は、夜の闇に三人の先人の面影を浮かべ、両手
を合わせる。そして、沈黙の内にかからは囁くのだ。

カトリックの意味する人の世の「普遍」を、汝の一篇
の詩に込めよ——と。



三島由紀夫、遠藤周作 を育てた神西清

曾我貢誠

神西清（じんざいきよし）それってだあれ？

それが長い間の私の偽らざる印象であった。しかし調べれば調べるほど、詩人として、翻訳家として、評論家としてとても大きな業績を残した人であることがわかった。

「女の愛を恐れよ。その幸を、その毒を恐れよ。」

この言葉は、私が高校に入った頃、偶然に買ったツルゲーネフの名作「初恋」の一節である。ツルゲーネフの父がよく語っていた言葉だといわれている。この本を買った理由はただとても薄い文庫本だったからである。思春期の少年の心の葛藤が描かれていた。最後のどんでん返しは、自分にとって強烈な印象を残した。そして最近になって、この文庫本は神西清が翻訳したのだということを知った。

神西清はロシア文学者であり、チェホフの有名な「桜の園」や「三人姉妹」「ワーニャ叔父さん」などを翻訳

した。他にアンドレ・ジイドの「田園交響曲」ゴリーキーの「どん底」ドストエフスキの「虐げられた人々」など膨大な翻訳がある。そして演劇などの戯曲として書き遺し、その多くが上演されている。しかも彼は詩人でもあった。全集第一巻では幼少期からの詩編も多数収められている。

私は視点を変えて、神西清が育てた作家、詩人との繋がり述べてみたい。彼は、後輩の三島由紀夫、親友の堀辰雄、遠藤周作に多大な影響を与えている。

三島由紀夫は、作家として不動の地位を占めたのは、彼が二十四歳、昭和二十四年に出版した「仮面の告白」がきっかけである。出版当初、余り評価は高くなかったが、十月に入り神西清が高評価を下すと文人仲間も同調し、彼の評価は鰻登りに高まった。その年の暮れには読売新聞の年間ベストスリーの小説に選ばれるまでになった。神西清は当時四十六歳で一番油の乗り切ったころである。翻訳本も多数出版しロシア文学においては日本の第一人者であった。三島の作品は初期の「花ざかりの森」から読み込んでおり、彼の才能を見抜いていた。「仮面の告白」は、当時としては画期的な同性愛を赤裸々に表現した作品である。彼は校正刷り段階でも読んでいた。おそらくアドバイスもしたであろう。解説の

中で、「この作品は力作である。」と断言している。三島に新しい可能性を神西は見たのであろう。

その最後には「さてこの作家はどこへ行くのか？ だが急ぐまい。仮面と告白の葛藤は今ようやく始まったばかりであり、(中略)見えざる深淵の苦悩は当分続くだろうからである。」と結んでいる。その後の三島の運命を予言しているようにも思える。

神西は、昭和三十二年に五十四歳で亡くなった。昭和三十九年に文治堂書店から、神西清全集六巻が刊行されると、当時文京区大塚にあった文治堂書店にぶらりと三島が買いに来たそうである。

堀辰雄とは、学生時代から終生変わらぬ友人関係が続いた。神西は堀の一年先輩であり、病気がちだった彼を生涯、陰で支えた。数学者になろうとした彼に、文学の道に呼び込んだのも神西である。神西は堀に萩原朔太郎の第二詩集「青猫」を紹介した。堀は詩の世界に取りつかれた。呼び込んだというよりは、堀自身が入り込んだという方が正確かもしれない。生涯連絡を取り合い、病床の堀を軽井沢追分に見舞ったり、元気な時は二人で奈良や大和路を旅行したりした。堀について神西は述べている。「彼は単に美しさを求め、うっとり美に見入った詩人ではない。彼の作品は、直接、人々に現実生活への

認識や指針を与えはしない。ただ、人々の心の奥深く潜んでいる人間的なものの本質を目覚ますことによつて、人生を立ち返ってくるのである。」その友人に暖かい言葉をかけている。自分の時間がなくなっても堀没後の全集の編集責任者になったのである。

遠藤周作が世に出るきっかけになったのも神西が関係している。遠藤が学生時代、初めて書いた評論「神々と神と」が神西に認められたからである。昭和二十二年、戦後間もなく新しい時代の新人を神西は発掘していた。その後、神西は、自分が編集している角川書店の「四季」にこの作品を掲載した。遠藤は喜びのあまりあちこちの書店を回り自分の活字になった文字を何度も眺めたという。やがて「沈黙」などの名作を生み出し、ノーベル賞候補にもなったが、終生、神西清を師と仰いだという。

神西清の残した功績は大きい。語学に秀で詩人としての素養を持ち、後輩を育てた神西、その業績にはもつと光を当てるべき文学者だと思ふ。

神西清の業績を評価し全集を出そうと決意したのは文治堂書店の創設者渡辺文治である。よい全集ができた両者に感謝したい。

トンボの輪

令和のドイツ事情

◎1919年にワイマール憲法が公布・施行され今年は100年目だ。男女平等普通選挙が行われ、現在の民主的な国がもつ国民の教育の平等など社会的権利を認めた憲法。ただもちろんこれは理念であり、ビジョンである。この年には第一次大戦に負けた故のベルサイユ条約受諾、賠償金の支払い、領土の没収で戦争責任のツケを払わされる。日本にも捕虜が多数きた。そして10年後にはあの男が。

◎建築・デザインに大きな影響をもたらしたバウハウス運動も100周年、ドイツ各地で催しがひらかれたが、こちらもワイマールが発祥の地。おっと、1919年は大正八年、私

の父もこの年に生まれた。

◎旧東ドイツを中心に1000頭前後いるという狼（日本と同じ種なのかは不明）を淘汰すべきかが州議会選挙での焦点の一つになった。羊が襲われて農家が困っている、という。緑の党は狼の狩猟に反対、犯人は9万頭いる猪かもしれないし鹿も6万頭いる、狼だけを殺すと生態系が壊れるというのだ。高速道路で様々な動物がひかれている。全体的に野生動物が増えているのは確かなようだ。更に農林大臣と環境大臣の間でも（ともに女性）同様な議論が起こっていた。

◎ドイツが誇るテニスの女王グラフもアガシと結婚して18年経った。50歳になりアメリカに住む。一方ベッカーは事業に失敗し、ばくちに手を出し禁治産者に。

◎クレジットカードに電子マネー、キャッシュレス化の波が一段と令和になって押し寄せている。小銭も札

も持たずに買物ができるという利便性。皇居の近くのオフィスビルには現金での対応をしないカフェがあるそうだ。つまり他国では、口座のない貧困層を完全に排除するシステムだ。アメリカの人口6%がこれにあたるという。

年配のむきはふざけた店だ、と思うのが当たり前。中国ではいつでも誰が何を買ったかがデータとして蓄積され、それが個人へのランク、たとえば融資への信用度に利用されているそうだ。決済には手数料がかかりはたしてキャッシュレス化の遅れが文化や経済の遅れだろうか？

韓国96%、中国66%の利用率、そして日本は20%、政府の思惑では5年後に倍にしたらしい。わたしを安心させてくれるのはドイツの16%、物々交換が石器時代からの経済の基本ではないのかな、と思う。

（耕太郎）

レイワの風

時代が令和に変わった時、私はインターナショナルスクールで教師をしていた。その日、ある小学2年生が放った一言。「Welcome, President Reival」（レイワ大統領、ようこそー）いやいや、日本に大統領はいないし、そもそも令和は人じゃない。そう伝えると、「じゃあ、レイワって何？」と困った顔。彼女は常につきとした日本人だが、学校では常にアメリカの教科書に学び、西暦のみを使っているのだ。「天皇ってわかる？エンペラー。」「プレジデントじゃないの？」「違う。国の象徴、シンボルなの。」……ダメだ、通じてない。日本にありながら、インターナショナルスクールは、さながら陸の孤島のようにだ。時折、強い日本の風が吹く外国。

逆に、海外の大陸にも似たような

孤島が無数にある。アメリカに住んでいた頃、日本語補習校で日系人の子ども達を集めたクラスを教えていたことがあった。日系2世、3世ともなると、見かけは日本人だが、中はアメリカ人に近い子も多い。そのない日本語を喋る子もいれば、アメリカ訛りの子もいる。人形の代わりにこけしを欲しがるといけば、日本の漫画にハマって英語版を読む子もいる。アメリカに永住していても、我が子には日本語と日本文化を受け継いで欲しいと願う親は多いが、子どもは素直なもので自分が面白いと感じるニッポンしか吸収しない。あと、美味しいものも。

さかのぼれば、2011年にあの地震が揺らしたのは、太平洋に浮かぶ日本だけではなかった。海外にある無数のニッポン孤島も大いに揺れた。前述の日本語補習校では卒業式があり、仙台出身の小学6年担任の先生が家族の安否もわからぬまま、

気丈に贈る言葉を述べていた。春休みには生徒も保護者も先生も学校に集まって千羽鶴を折り、メッセージを書いて日本に送った。私は2週間、自分のベッドでは眠れなかった。

かように日本よりも海外で暮らした年月の方が長い私だが、なぜか改元の時に住んでいるのはいつも日本だ。吉祥寺の駅から電光掲示板に見た「昭和天皇陛下崩御」の文字。インターナショナルスクールの「新しい年号はレイワだよ」と真っ先に教えてくれたフィリピン人の同僚。その時、海外にある数々のニッポン孤島では、一体どんなレイワの風が吹いたのだろうか。レイワを人だと思っただ子どもはいただろうか。

ようこそ、令和さん。日本にもニッポン孤島にも、良い風を送ってくださいね。
(前木)

令和とわたし

新たな時代の元号が発表された四月一日、私はテレビの前でその時を待っていた。テレビに映る新元号を発表する官房長官が持つ額縁に記された文字は「令和」であった。すぐにピンとはこない名前だったが、思えば「平成」も最初はピンとこなかったから、少し時間が過ぎた頃には馴染むだろう、と思った。

一概に時代の良し悪しを判断できないが、ふり返ると私にとっての平成は、思春期を経て社会に出て、家庭をもつという人生の重要な過程があった。幸せな日々であったというよりは、公私共に思い通りにいかず、悩むことの方が多い季節であった。だが、平成の間に、私が恵みとして受け取ったものはある。詩作と朗読の道を歩むなかで、いくつものかけがえのない出逢いや心に残る数々の場面があった。また、若き日

から（詩人になりたい）という夢ばかりを求めていた半面、心のなかでは（自分は収入も少ないから、家庭をもてないのでは…）という不安がよぎっていた。今は縁あって詩の道深く理解する妻と、人なつっこいダウン症児の息子と共に豊かな日々を歩んでいる。息子がテーマの詩集も出版したのだから、個人的には平成で過ごした日々に、感謝の思いがある。

社会的には災害の多い時代で、犠牲となった無数の人々があり、計り知れない悲嘆と、重要な課題は今も続いていることを思う。「平成」という名の通り、日本において戦争が起ころなかつたのは良かったが、では——本当に全ての人々の心は平和であったか？ と問うならば、決してそうではない。

コンピュータや携帯電話という文明の利器の普及は否定できないが、人と人が顔を合わせ、言葉を交わし、

心を通わせるコミュニケーションは平成の間に希薄になっていった。家族形態も核家族が増えた。これらは精神を病む人々が増えた要因であろう。自死三万人を超える年が長く続いた平成は、本当に平和を実現した時代とはいえず、人の心の問題は、令和の大事な課題の一つである。

「令和」は、『万葉集』の序文から引いた言葉、「時に初春の令月、気淑く風和ぐ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」から由来し、さながら詩のようである。この文には自分らしい花を咲かせるという意味もあり、日本人の自然を感じ取る詩情が込められている。

これからの「令和」という時代に、日本の詩歌の伝統に繋がる詩の言葉が生まれ、人々に親しまれ、日本人の心を回復してゆくことを、私は密かに願っている。
(服部)

木崎湖でのキャンプ

学生時代以来、十数年ぶりにキャンプに行ってきた。キャンプといっても、バンガローを借りたのでテントは張っていない。行きつけの酒場の、アウトドアが趣味のバーテンダーの発案で、参加者は別の若い店員ともう一人馴染みの客の計四人。行き先は信州白馬の南に並ぶ、仁科三湖の一つ木崎湖だ。

このパーティでの私の需要は、ひとえに四人のなかで唯一運転ができて車を持っているという点にある。その他はあまり役に立つとも思えないので、現地ではできるだけ邪魔にならないよう振る舞っていたつもりだ。それでも運転手ながら一番深酒をしていたり、夜の場合を徘徊して小川に落ち、『フランダーズの犬』のネ口のように焚火で服を乾かす羽目になったりと、充分気を揉ませていたように思う。

火を囲むと、どうも人は素直になるようだ。自他ともに認めるヒネクレモノの私が言うのだから間違いない。原始の頃からの人類の最も古い社交場の一つだったからだろうか。揺らめく明かりが、お互いの顔を見分けられる程度に浮かび上がらせる限定された空間。無礼講などと野暮な言葉を出さずとも、人が平等になれる十分条件が、そこには揃っているように感じられた。

木崎湖は仁科三湖で二番目に広い。小さくはないが、大きくもない。生憎、天候は曇りで北アルプスの山々までは望めなかったが、緑に交じる赤や黄の木々の丘に囲まれ、水面を眺めて起きる朝というものは随分と贅沢に思えた。幹事の彼は竿を持参で、朝の空いた時間に釣りに立った。沖にはやはりボートを駆った太公望が幾人か繰り出していた。日が昇ると、三十分おきくらいに、湖畔を走るJR大糸線の汽笛が聞こえる。揺

れる水面は、どうも人を静かにさせるようだ。私が興味本位で脇に来るものだから、彼も静かに竿の振り方をレクチャーしてくれた。文王はおろか黒鱒もかからなかったが、リール付きの竿を初めて触れたのが、私にとっては何より釣果だった。

ちなみに今回、この場所を推したのは他ならぬ私だった。選んだ理由は、例の個人趣味だ。このキャンプ場の隣には、武田信玄の五男仁科盛信にしなりののぶの居城跡があった。長野の県歌『信濃の国』をご存知の方なら、五番にある「仁科の五郎盛信」がその人である。盛信は、今では桜の名所として知られる高遠城を守り、織田の大軍を相手に散ったが、静かな湖畔の城跡では夏草が最後の色を湛えていた。

その後、朝つばらから散策と称してふらといなくなった私が、やれやれの顔で迎えられたのは言うまでもない。

(熊野)

ネコと私

十五年ほど前、私が中学一年生くらの時、近所にネコを散歩させているおじいさんがいた。実際散歩というよりはほとんどネコが行くままにさせていた。私の家の前もよく通っていて、ちょうど自転車をガレージにいれようとする時にネコとおじいさんが中において少し驚いたこともあった。そのネコはうちのガレージが好きらしく何度かそういう時に出くわした。しかしいつもおじいさんとネコは私が来ようがあいさつもせず出て行くとうとしない。逆に私が遠慮して自転車を手端つこの方に置いていくという始末である。いつも見慣れている人であったから別に私の方でも何も言わなかったし、家に帰って母親に話してもいつものことだからと特に気にしてもいなかった。

二、三年後には「ふたり」の姿を見なくなつた。しかしそれから数ヶ

月たったころだろうか、おじいさんは今度は犬を散歩させていた。ネコはどうしたのだろうか。死んでしまったのだろうか、それともおじいさんの家族が、リードを繋いで散歩するのはネコがあまりに気の毒とみえて代わりに犬を飼つたのだろうか。私はネコの行方を案じた。あのネコがどうなつたのかは分からない。ただおじいさんはそれからしばらく犬を散歩させていた。今ではもうおじいさんとその犬も姿を見ることはできないが。

それから幾年か経って、今私の家にはネコが三匹いる。元々は四匹だったのだが、一匹は姉に随分なついていたので、嫁いでいった時に一緒に連れて行ってしまった。今でも姉夫婦が旅行に行くときにはうちへ里帰りしてくる。

四匹とも元々野良ネコであつた。一匹目の白ネコは家の近くの大きな公園で、椿の下にまだ目も開いてお

らず、へその緒もついたまままで捨てられていたのを保護した。二匹目は茶トラ柄に白色が所々混じっているネコで、家の裏にある月極駐車場にこれまた目が開いていない状態で段ボールに捨てられているのを保護した。三匹目、これは姉が連れ行つた三毛猫であるが、よく家の周りを三毛猫三姉妹でうろちよろしていたものであつたが、その一匹だけやけに人になつておりそのまま家に入れてしまった。最後の四匹目は茶トラで家のネコのうち唯一の雄である。子ネコの頃家の周りをうろついていて、ある日くしゃみをしているのを見た母が一度家でお風呂に入れてあげたのだが、どうしても可愛くなつてしまひそのまま家のネコとなつたのである。

今ではもうネコがいる生活が当たり前になつている。平成の終わりから令和にかけて、そうしてこれからもずっとネコと私だ。

(宮田)

読者の輪

(8号より)

★「陸軍看護婦」の三評を読み、あらゆる機会に戦争を語り継がなければならぬと思います。阿武さんの感情を挟まず、文章の表現力と説得力に力強さを感じました。(K)

★「黒の惑星」「最後の質問」この二つのお作品で、心が洗われたような気がしました。「戦後の後遺症」を拝読し、戦争とは殺し合いである。私の心の叫びが聞こえてきました。昭和十一年生まれの私は焼夷弾・照明弾・B29に怯えた日々でしたので、芯の優しさは似ております。(U)

★近藤さんの「尋麻疹」は形態詩としてなかなかの妙を味わいました。画期的な詩だと思えます。(H)

★熊野さんの「死と詩」は、命について改めて考えさせられました。(M)

★「人の心と宇宙の深淵、それを結びつける物理法則の真理。心と自然をミクロからマクロへと壮大なスケールで統合するかのような詩、大変興味深く拝見しました。北川光彦さんはこんな風な見方ができるのか

と、とても新鮮でした。

★「光太郎ルーツ…」素晴らしい本です。湯川秀樹先生が、原発の将来を危惧する詩を作っていたらしたことからはじめて知りました。吉本隆明さんがあのような方であることも。人間が科学の進歩によって自身を破壊させるのではと心配です。(S)

★「歩く本」とても不思議な感じを受けましたが、想像を掻き立てられて大変興味深かったです。(A)

★「ひとり母語」は、最後連がすべてを表しています。「そんな感じが私は好きだ。」は納得させられます。

「約束」は出生の秘密を決してマイナスで考えまいとする姿が見事です。「田舎道」は田舎道に対するノスタルジックな思いを感じますが、とても柔らかな感性で伸び伸びとして抒情的な感覚がとても新鮮に感じられます。(N)

★仙酔余滴、連翹忌通信、毎回楽しく読ませていただいています。次回が楽しみです。(T)

★「トンボの輪」では市川さんの「現世の仕事」が心に残りました。(S)
(返信から抜粋させていただきました)

短信

▼八月第二十八回、女川「光太郎祭」が開かれ、ギター演奏、光太郎の詩の朗読や、オペラ歌手、本宮寛子さんによる歌などがありました。また、女川町長須田善明さんも参加され、東日本大震災で流された詩碑の再建の見通しがついたと報告がありました。完成が待たれます。

▼◆神西清全集・全詩集。箱入り、467頁、定価4500円を特価2000円(転売不可)(払込料、送料込み)但し二〇二〇年十二月まで。

◆北川太一著「光太郎ルーツ、そして吉本隆明ほか。阿武千代著「陸軍看護婦」も、メールかFAXで弊社にお申し込み下さい。こちらはどちらも1430円(払込料、送料込み)。
▼昭和九年に自費出版された野澤一詩集「木葉童子詩経」復刻版がコーサルサック社から刊行されました。本誌51頁をご覧ください。

【訂正】トンボ8号◆市川恵子1頁目次、風の惑星(誤)↓黒の惑星(正)◆マエキタリコ「ひとり母語33頁目「浦島花子の漢字の読みで」誤)↓「浦島花子」漢字の読みで」(正)訂正お詫びします。(編集部)

編集後記

一昨年の晩秋の頃のことだ。朝から冷たい雨が降っていた。神楽坂にまだ日本詩人クラブの事務所があったころ、毎月、有志で「詩のサロン」なるものを催していた。その日の講師は、菊田守さん。高齢のため、念には念をと、思い前日、私は確認の電話も入れていた。もう予定の時刻を三十分も過ぎている。先ほど自宅に電話を入れたが、奥さんは予定の一時前には家を出たといった。

「もしかしたら、赤城神社のことじゃないの？」Hさんが言った。「それだ。」昨日の電話で菊田さんは「場所は神社の隣だよ。ね。」と聞いた。私は「そうです。」と答えた。これが間違いの元だったのだ。同じ神楽坂で、事務所は北野神社の隣にある。菊田

さんは旧エミールの隣の赤城神社と想っていたのだ。

Hさんは雨の中を、赤城神社に向けて走り出した。それから三十分後、雨に打たれ、すっかり冷え切った二人が到着した。町内の祭りのためタクシーも拾えず歩いてきたという。

やがて元氣を取り戻した菊田さんは語り始めた。「『古池や』という句があるだろう。この蛙は雄ですか、雌ですか。』同沈黙する。「雄です。ポツ（坊）チャン」どっと笑いが起こった。翌日、反省を込めて手紙を書いた。「頂いた詩の中で『コロッケ』は菊田さんの代表作として残ると思います。『弟さんの突然の死を素直に書いた作品だ。』この六月、菊田さんの訃報に驚いた。八十四歳。今頃は弟さんと、お酒でコロッケでも食べているのだろうか。（桶屋風太郎）

ト ン ボ 第 9 号

発行 2019年12月15日
編集者 曾我貢誠
装画 成川雄一
発行者 勝畑耕一
発行所 文治堂書店
〒167-0021 杉並区井草2-24-15
E-mail: bunchi@pop06.odn.ne.jp
郵便振替 00180-6-116656
印刷製本 エム企画印刷
〒112-0005 文京区水道1-5-20

安川定男

四六判 二三〇頁
二、六〇〇円

詩と音楽

白秋、朔太郎の韻律を分析、ドビュッシー、ラヴェルを通じて詩と音楽との係わりを追究する。齋藤磯雄、高田博厚、山崎栄治らの良き師友に囲まれ、名ピアノリストの妻との語らいの中で、著書は豊かな音楽的思考を培った。

秋山賢司

B6判 二〇〇頁
一、二〇〇円

碁の句——春夏秋冬——

碁の背後にはさまざまな文化的文芸的な厚みがあります。俳句がそのいい例でしょう。ほかにこんな素晴らしい知的ゲームは考えられません。本書を多くの方にお勧めするゆえんです。
(天竹英雄名誉碁聖)

吉田邦郎

忘れられた宗教哲学者

斎木仙酔

四六判 四二〇頁
三、五〇〇円

古今の宗教・哲学・詩歌・文学を包括し、独自の世界観を目指した斎木仙酔(一八八〇—一九三三)の評伝。仙酔の孫である著者、六〇〇枚の労作。年譜・書誌・四百人超の人名索引付。

阿武千代

四六判 二二〇頁
一、三〇〇円

陸軍看護婦

戦争末期の広東、厳しい軍隊の規定にあつて、著者は赤痢、チフス、コレラ患者の伝染病棟で看護婦として従事した。波第八六〇一部隊とよばれた陸軍病院での実体験を綴る。佐藤愛子氏推選

曾我貢誠 詩集

二〇〇頁
一、五〇〇円

学校は飯を喰うところ

「いじめを一人でもなくすこと」「先生を五分でも早く家庭に帰すこと」そんな思いで、元中学教師が心を込めて綴った学校詩集! 昔、中学生だったあなたも読んでみて下さい。(著者)

秋山清

二五〇頁
一、五〇〇円(税込)

短歌入門

誰にもできる
作歌と鑑賞

「わたしたちは自分の現代詩を書くためにも、短歌の古さと伝統的な力を知らねばならない」
詩人 秋山清(一九〇四—一九八八)半世紀ぶりの再刊
装幀 坂井てい

弊社の書籍は一般の書店には並びません。送料無料ですので直接の購入が便利です。定価はすべて税抜価格です。



9784938364403

ISBN978-4-938364-40-3

C9092¥0400E



1929092004002

定価 400 円 (税別)

文治堂書店

